様　式　Ｃ－１８

領域略称名：西アジア都市
領 域 番 号：5001

令和５年度科学研究費助成事業
「新学術領域研究（研究領域提案型）」
に係る事後評価報告書

「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」

領域設定期間

平成３０年度～令和４年度

令和５年６月

領域代表者　筑波大学・人文社会系・教授・山田　重郎

目　　次

研究組織

1　総括班・総括班以外の計画研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
2　公募研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

研究領域全体に係る事項

3　交付決定額・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
4　研究領域の目的及び概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
5　審査結果の所見及び中間評価結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況・・・・・・・　8
6　研究目的の達成度及び主な成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
7　研究発表の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　15
8　研究組織の連携体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
9　研究費の使用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21
10　当該学問分野及び関連学問分野への貢献の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　23
11　若手研究者の育成に関する取組実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24
12　総括班評価者による評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　25

研究組織（令和５年３月末現在。ただし完了した研究課題は完了時現在、補助事業廃止の研究課題は廃止時現在。）

１　総括班・総括班以外の計画研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数[2]
X00 総	18H05443 西アジア都市文明論	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	山田　重郎	筑波大学・人文社会系・教授	12
A01 計	18H05444 西アジア先史時代における生業と社会構造	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	三宅　裕	筑波大学・人文社会系・教授	7
A02 計	18H05445 古代西アジアにおける都市の景観と機能	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	山田　重郎	筑波大学・人文社会系・教授	6
A02 計	18H05446 古代エジプトにおける都市の景観と構造	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	近藤　二郎	早稲田大学・文学学術院・名誉教授	14
B01 計	18H05447 古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	安間　了	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部・教授	18
C01 計	18H05448 中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	守川　知子	東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授	5
C01 計	18H05449 西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究	平成 30 年度 ～ 令和 4 年度	松原　康介	筑波大学・システム情報系・准教授	18
計		平成 30 年度 ～ 令和 4 年度			
計		平成 30 年度 ～ 令和 4 年度			
計		平成 30 年度 ～ 令和 4 年度			
総括班・総括班以外の計画研究　計　7　件					

[1]　総：総括班、国：国際活動支援班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究

[2]　研究代表者及び研究分担者の人数（辞退又は削除した者を除く。）

２　公募研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数[2]
A01 公	19H05030 メソポタミア外縁における新石器化から都市化への移行に関する研究	令和元年度 ～ 令和２年度	小髙　敬寛	金沢大学・国際文化資源学研究センター・特任准教授	1
A01 公	19H05031 化学分析で評価する西アジア先史社会のヒト・穀物・動物の移動と社会構造	令和元年度 ～ 令和２年度	板橋　悠	筑波大学・人文社会系・助教	1
A01 公	19H05033 西アジアの都市化と遊牧民交易	令和元年度 ～ 令和２年度	足立　拓朗	金沢大学・歴史言語文化学系・教授	1
A01 公	19H05043 前３千年紀におけるインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究	令和元年度 ～ 令和２年度	上杉　彰紀	金沢大学・国際文化資源学研究センター・特任准教授	1
A01 公	21H00002 西アジアの都市化と先史時代の遊牧民交易	令和３年度 ～ 令和４年度	足立　拓郎	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・教授	1
A01 公	21H00003 都市化過程におけるメソポタミア外縁部の考古学的研究	令和３年度 ～ 令和４年度	小髙　敬寛	金沢大学・国際基幹教育院・准教授	1
A01 公	21H00010 イラン東部へのウルク文化の拡大に関する考古学的研究	令和３年度 ～ 令和４年度	安倍　雅史	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・室長	1
A01 公	21H00009 前期青銅器時代の集落構造からみたアナトリアの都市化	令和３年度 ～ 令和４年度	紺谷　亮一	ノートルダム清心女子大学・文学部・教授	1
A02 公	19H05037 サーサーン朝時代の都市とキャラバン・ルートに於けるゾロアスター教拝火神殿	令和元年度 ～ 令和２年度	青木　健	静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター・教授	1
A02 公	21H00006 古代メソポタミア北部におけるニネヴェ５期と古バビロニア時代の土器研究	令和３年度 ～ 令和４年度	沼本　宏俊	国士館大学・体育学部・教授	1
A02 公	21H00008 後期青銅器時代から初期鉄器時代の南レヴァントにおける都市変容の考古学的研究	令和３年度 ～ 令和４年度	長谷川　修一	立教大学・文学部・教授	1

B01 公	19H05035 イランの石筍・トラバーチンを用いた西アジアの古気候復元の試み	令和元年度 ～ 令和２年度	南　雅代	名古屋大学・宇宙地球環境研究所・教授	1
C01 公	19H05032 「寛容」と先例：近世・近代のタブリーズにおけるアルメニア教徒とムスリム社会	令和元年度 ～ 令和２年度	阿部　尚史	お茶の水女子大学・基幹研究院・助教	1
C01 公	19H05034 近代化にともなう灌漑水路と都市拡張の関係についての地中海都市比較研究	令和元年度 ～ 令和２年度	佐倉　弘祐	信州大学・工学部・助教	1
C01 公	19H05036 トルコ・カッパドキアの都市文化・景観保全に向けた岩窟教会の風化対策に関する研究	令和元年度 ～ 令和２年度	伊庭　千恵美	京都大学・大学院工学研究科・准教授	1
C01 公	19H05038 西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究	令和元年度 ～ 令和２年度	三田村　哲哉	兵庫県立大学・環境人間学部・准教授	1
C01 公	19H05041 イスラーム期の西アジアにおける墓地と都市	令和元年度 ～ 令和２年度	大稔　哲也	早稲田大学・文学学術院・教授	1
C01 公	19H05042 15 世紀後半のヘラートにおけるタリーカの活動と都市文化の発展	令和元年度 ～ 令和２年度	杉山　雅樹	京都外国語大学・国際言語平和研究所・研究員	1
C01 公	21H00005 20 世紀前半フランスにおいて東洋の建築・都市に貢献した建築家に関する研究	令和３年度 ～ 令和４年度	三田村　哲哉	兵庫県立大学・環境人間学部・教授	1
C01 公	21H00007 中世カイロにおける水資源共有の知恵と水インフラの研究	令和３年度 ～ 令和４年度	吉村　武典	大東文化大学・国際関係学部・准教授	1
公募研究　計　20　件					

[1]　総：総括班、国：国際活動支援班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究

[2]　研究代表者及び研究分担者の人数（辞退又は削除した者を除く。）

研究領域全体に係る事項

３　交付決定額

年度	合計	直接経費	間接経費
平成 30 年度	264,290,000 円	203,300,000 円	60,990,000 円
令和元年度	144,950,000 円	111,500,000 円	33,450,000 円
令和 2 年度	136,630,000 円	105,100,000 円	31,530,000 円
令和 3 年度	114,010,000 円	87,700,000 円	26,310,000 円
令和 4 年度	110,370,000 円	84,900,000 円	25,470,000 円
合計	770,250,000 円	592,500,000 円	177,750,000 円

４　研究領域の目的及び概要

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時の領域計画書を基に、具体的かつ簡潔に２頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、どのような点が「革新的・創造的な学術研究の発展が期待される研究領域」であるか、研究の学術的背景や領域設定期間終了後に期待される成果等を明確にすること。

【研究課題】

紀元前 4 千年紀の後半、南メソポタミア（現イラク南部）において人類史上初の都市が成立した。大型公共建築物と城壁を持ち、種々の職業に従事する大人口が一定のヒエラルキーのもとに統合され、周辺世界の政治と経済の核となる複雑社会がここに誕生する。このような都市文明という社会様式は、前 3～2 千年紀には、メソポタミアとその周辺の広域に拡散し、西アジア各地に多数の都市が成立した。こうして、都市を中心に地域の在り方が決定づけられる政治的・社会的・経済的・文化的構造が西アジア全域に形成された。その後、大人口が集住する都市は西アジア以外の各地でも様々な様態で出現し、現在、地球上の各地に及んだ都市主導型の社会は、地球的規模で人間社会の在り方を決定づける主要な原理になっている。

西アジアは、農耕、牧畜、冶金、文字記録、一神教、そして都市文明といった人類史に大きな影響を与えた文化的革新が地球上で最も早く生じた地域であり、西欧世界の思想的源流であるユダヤ・キリスト教文化の故地でもある。そのため、19世紀以来、多くの考古学的調査が行われ、イラク、イラン、シリア、トルコ、パレスチナを中心に何百もの都市遺跡が調査された。これらの考古学的発見を通し、各地で都市の景観と機能が明らかにされてきた。そして、紀元前3500~3200年ころ都市で行政記録のために発明された世界最古の文字システムが、楔形文字書字法として洗練されながら西アジア各地に伝播し、複数の言語の記述に応用された。この結果、前3千年紀から紀元前後の時代に至るまでの長期間、古代世界において出色の文字文明が西アジアにおいて繁栄し、大量多種の文書に、都市社会の様相が記録された。

このように、古代西アジアは、都市主導型の文明が地球上で最も早く高度に発達した地域であり、豊富な考古学的資料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの文字史料によって、都市文明の発生とその変容に関する大量のデータを提供する。人類の都市との関わりの原点であり、人類史上最古の都市をめぐる濃密な歴史的経験であった古代西アジア都市の諸相の解明は、都市の本質を問うために決定的な価値がある。古代西アジア都市を、民主的なギリシア都市に対する専制的オリエント都市とみる西欧の古典的・傾向的理解は批判されて久しいが、西アジアにおける都市の発生と変容、都市の環境や人間社会との相互影響関係、都市景観の様相、都市の諸機能を種々の史資料に照らして実証的に解明し、現代に至るまでの都市のタイポロジーに照らして歴史的に評価する試みは、都市型社会の理解に向けた意義深い課題として未完のまま残っている。この課題に取り組むことが本領域の目的である。

【融合領域】

本領域研究は、既存の学問分野の枠に収まらない融合領域を創成し、学際的連携によって人間社会の都市化という歴史的現象の解明を目指す計画である。その中核的な役割を果たすのは、考古学である。19 世紀以来、西アジア各地の都市遺跡で発掘調査が行われたが、当初は神殿・宮殿などの大規模建築物、権力者の残した見栄えのするモニュメント、粘土板文書に代表される文字史料などの発見に調査目的が限定されていた。しかし、調査地域が広がり、調査方法が精密化するにともない、調査対象も、市民セクターを含む都市構造、都市の周辺に広がる村落の分布、都市に関連する水利設備や交易路、家畜の放牧・遊牧と関連する痕跡などといった広義の「都市景観」に及んできた。現在では、都市をトータルに分析する研究原理としての考古学の重要性はますます高い。

考古学と連動し、都市で営まれた人間社会の諸相の研究に寄与する学問分野が文献学である。先述の通り、南メソポタミアで前 3200 年頃に発明された書字技術は、西アジアの広域に伝播し、各地の都市遺跡からは、粘土板や石碑をはじめとする種々な媒体にシュメル語、アッカド語、エラム語、ヒッタイト語、ウガリト語、古代ペルシア語などで書かれた大量の楔形文字文書、ならびに石材、オストラカ、パピルス、羊皮紙などに書かれたアラム語、ギリシア語の諸文書が知られている。こうした豊富な文書史料は、王権や神殿を中心とした政治と行政、農耕・牧畜・手工業・交易のような産業、法と社会制度、建築・数学・天文学などの科学、宗教と儀礼、文学と思想など、都市とその周辺で営まれた人間社会の諸相について豊富なデータを提供する。

考古学と文献学に加え、都市を取り巻く環境、資源、ならびに農業・工業・交易等の産業の分析に

は、自然科学分野の参画が不可欠である。具体的には、都市遺跡に由来する動植物の遺存体を同位体分析などによって分析し、食生活や農耕・牧畜の動植物学的な詳細を解明すること、都市内部やその周辺に見られる鉱物・石材・土壌（粘土板やレンガの素材）・水を採取して化学組成を調べ、都市に供給された金属・石材・河川堆積物の起源とそうした資源環境の地理的広がりを把握すること、衛星画像を用いて灌漑・農業用水の取水システムの変化を追跡し、都市への水の供給システムの変遷を探ること、地震や災害の都市への影響を地球科学的な分析によって評価することなど、都市と環境・資源の関係についての極めて重要な問題が扱われる。

こうした考古学・文献学・自然科学の学際的連携によって、都市文明の諸要素が芽生えた先史時代から都市が誕生して変容を重ねていく前 3000 年頃をへてヘレニズム・ローマ期に至るまでの期間に、都市空間はどのように構成され、そこでどのような社会が営まれ、いかなる思想が生まれたのか、都市とその周辺の村落や遊牧社会はどのような関係にあり、都市と都市はどのようなネットワークで結ばれたのか、都市文明は周辺の環境にどのような影響を与え、環境は都市の在り方をどのように規定したのか、といった一連の問題を通時的・共時的に明らかにすることが本領域研究の課題である。

「都市とは何か」という大きな命題を古代西アジアという都市文明の古層に探る本領域の目的は、西アジアの隣接地域の都市、ならびに後代の西アジア都市をもある程度射程におさめ、古代西アジア都市の特徴を相対的に評価することによって補完される。これにより、古代西アジアの都市文明の個性を浮き彫りにし、その後代への影響を考察すると同時に、現代人に忘却された西アジア都市文明という歴史的経験を再発見して、都市文明と人間社会の関係を深く広く探求し、現代の都市主導型文明を内省的に再考して、サステナブルな未来をもたらすための都市文明論を提示することが、追及すべき到達点である。こうした到達点を視野に、本領域研究は、西アジアと隣接する古代エジプトの都市研究と中世から現代に至るまでの西アジア都市を研究する複数の計画研究を含んでいる。葬祭装置の発達が顕著で、都市遺構の発見に乏しく、かつては「都市なき文明」と呼ばれた古代エジプトだが、近年は、都市型居住地の形成と都市化の詳細が積極的に研究され始めた。また、中世以降の西アジア都市は、古代の都市プランを継承しつつ、イスラーム都市、近代都市として変容を遂げた。こうした研究分野をカバーするエジプト学、イスラーム学、西アジア史学、社会人類学、都市計画学、都市社会学、文化遺産学等の研究者が本領域に参画する。

こうして、本領域は、異なる学問分野がそれぞれの分野内に孤立していては獲得できない広い視野に立って、学際的に協働することで、古代西アジア都市という大きなテーマに臨み、そこに都市文明の本質を考究する実証研究と理論研究を実践する。具体的には、西アジア都市文明の発生・拡散・変容の歴史的プロセス、ならびに都市の景観と機能の多様性を、地域的な広がりを踏まえながら分析し、古代から現在までの西アジア都市の在り方を通時的・共時的に俯瞰する。同時に、長期にわたる都市化の歴史において、都市文明が地球環境にどのような影響を及ぼし、また、どのような社会観やイデオロギーの変化を人間社会にもたらしたのかを人類学的あるいは文化論的に考察し、長い歴史を通して累積された都市文明の姿に照らして現代の都市文明の在り方を省察し、現代社会に対して有意義な提言を導きだすことを目指す。

【成果と展望】

フィールドワークと資料研究に基づいて、西アジア都市の諸相に関して、先端的個別研究を学術雑誌に多数発表すると同時に、古代西アジア都市文明の歴史的展開に関して、最新の研究成果を踏まえて、国際標準になる「総論」を提示するにたるデータを蓄積し、これを分析、議論してきた。

都市文明誕生の前提となる先史時代から前 4 千年紀末の都市の発生をへて、ヘレニズム期にいたるまでの古代西アジア各地の多様な都市の姿を、異なる時代と地域を専門とする国内外の研究者が協働して、時空間の比較格子の中に捕捉した前例はない。先行研究の渉猟と批判的検討のうえに、領域研究の参加者が行う個別研究の成果を上乗せすることで、都市文明の発生と変容の過程を多岐にわたり分析した。また、古代西アジア都市の諸相を後代の都市のそれと対比し、古代から近現代までの西アジア都市の姿を通時的に把握するように努めた。

これら研究活動の成果を生かして、計画研究が分担して執筆する英文の研究叢書 *Cities in West Asia and North Africa through the Ages*, 5 vols. を公刊し（後述「10. 当該学問分野及び関連学問分野への貢献の状況」）、今後数十年間、国際学界において基本的な学術業績として参照され得る最新の「総論」を作成する計画を軌道に乗せた（2024～2025 年完成予定）。また、この叢書に収集される情報と分析を生かして、「都市文明の発生と変容」、「都市の諸類型」、「現代都市文明の課題と展望」をコンテンツとする一般向けの和書を準備・公刊し、研究成果を広く一般社会に還元することを展望している。

５　審査結果の所見及び中間評価結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況

研究領域全体を通じ、審査結果の所見及び中間評価結果の所見において指摘を受けた事項があった場合には、当該指摘及びその対応状況等について、具体的かつ簡潔に２頁以内で記述すること。

（審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況）

【申請結果の所見において指摘を受けた事項】

第１点は、古代西アジア研究から、人類社会における都市文明の本質の解明、ならびに都市文明の将来への提言を導くことの困難さを指摘するものである。例として、所見の一部を引用する。

・「古代西アジア都市の研究としては着実な成果が期待できるものの、本研究領域がそのような実証的研究を土台に、いかにして人類社会における都市文明の本質を解明し、都市の未来に向けて提言するところにまで到達するかについては、領域推進の計画・方法を見直し、公募研究による強化が必要である。」

・「本研究領域においては、考古学的手法を主軸とする古代西アジア都市の研究を現代都市研究そして普遍的な都市文明論へと発展させていく具体的な計画・方法に不明瞭な部分がある。この点については、研究項目C01 の研究計画「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」の研究計画・方法を再考するとともに、研究分担者の追加や公募研究の重点的配置によって補強するなど、特段の改善が必要である。」

第２点は、考古資料の化学分析や地質調査を通じて、西アジア都市の都市化の背景となった自然環境と都市化の進展にともなう環境変化を分析・研究する計画研究４（研究項目 B01）の予算規模の大きさとそれに見合う成果を求めるものである。以下がその所見である。

・「本研究領域の全体経費のうち、計画研究 B01 に係る経費が占める割合は高い。とはいえ、当該計画研究の目的に照らして一定の妥当性は認められるため、本研究領域全体の目的に寄与するものとして認めるものの、予算規模に見合う研究成果が得られるよう努力いただくことを期待する。」

【対応状況】

第１点に関しては、特に現代の西アジア都市の都市計画と問題を研究課題とする計画研究 6（研究項目 C01）に寄与する研究者をより多く集め、公募研究とも連携しながら、研究の裾野を広げることを求めた。その結果、採択時には、都市計画学、文化人類学、文化財研究を専門とする 4 名の研究者（松原、木村、谷口陽子、田中）からなっていた計画研究 6 は、人材面で強化され、分担者は 4 名から 18 名になった。そこには、都市計画（松原、中野、田中)、文化人類学（木村、田中)、文化財研究（谷口陽子、山内)、に加え、近未来交通研究（谷口守)、防災復興計画研究（廣井)、都市工学（中島)、国際協力（武藤)、トルコ、エジプト、シリア、中央アジア、北アフリカ、南アジアなどの各地の諸都市でフィールドワークに従事する地域研究の研究者（川本、渡邊、塩谷、柳沢、田中、杉本、守田）が含まれており、より多角的に西アジアの現代都市を研究する陣容が整った。

また、12 件の公募研究の内、その半数の 6 件は、研究項目 C02 と関連しており、イラン、エジプト、アフガニスタン、トルコ、フランス、地中海沿岸各地の都市計画、社会史、文化遺産をめぐる研究であり、現代の西アジアとその周辺の都市の研究を行っている。これもまた近現代の都市研究の強化に貢献しているといえる。

領域研究が研究期間の後半に差し掛かるのを機に、研究項目 C01 と総括班を中心に都市の景観・構造と都市社会の関わりを再考し、西アジアの枠に必ずしもとらわれずに「都市とは何か？」という命題に答えるべく、社会学者や都市人類学者を加えた研究会やシンポジウムを企画することにした。それによって、古代から現代までの西アジア都市研究の成果をベースに、「都市文明」という大きなテーマについて考察する気運の醸成を目指した（後述)。

第２点に関しては、メソポタミアとその周辺における都市化の環境的基盤となった水環境や地形変化を追跡するための資料収集を進めた。また、もっとも大きな予算を計上したマルチコレクター型 ICP 質量分析システム一式は、予定通りに筑波大学に設置され、調整が行われた。その後、領域研究の枠で行われるフィールドワークによってもたらされた試料を測定しながら習熟を繰り返し、データの集積が進んでいった。

（中間評価結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況）

【中間評価結果の所見において指摘を受けた事項】
中間評価においては、都市主導型の文明が最も早く発達した西アジア地域に焦点を当て、都市の発生と変容、環境と人間社会の相互作用や都市の諸機能を史資料に照らして解明しようとする構想と、都市文明という広大なテーマを展開している点は好意的評価を受けたが、分析機器の一層の活用と都市文明という全体テーマの解明に向けてさらなる研究の進展を望むという所見が示された。これは、上述した領域研究開始時の「申請結果の所見」によって指摘されたポイントと基本的に共通のものであり、これらのポイントが評価者の立場から引き続き課題とみられていることが改めて示された。一方、コロナ禍や政情不安により現地調査が困難である状況を、現地協力者と日本の研究チームの協力で克服する努力を評価し、なお一層の努力を鼓舞するコメントもあった。

【対応状況】
海外調査と科学分析：西アジア各地のフィールドとの連携を深め、リモートで現地の研究協力者に遺跡調査・地質調査を進めてもらう方法がイラクの研究協力者との間で引き続き試みられたほか、現地で管理される遺物、土壌、鉱物資料やその情報を送付してもらい日本の分析機器を用いて分析・研究することも行われた。

2020（令和 2）年度から最終年度の 2022（令和 4）年度にかけて、領域の各計画研究班のフィールドワークが新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため不可能になった。そのため、領域による現地調査と連動した遺物・土壌・鉱物資料の分析データベースの構築は予定通り進まなかったが、輸入済みであったスラグや発掘残土に含まれる金属粒子を用いて、冶金考古学的研究を推進した。また、西アジアの現地研究者との連携を深めながらメソポタミア氾濫原堆積物や粘土板胎土、岩石・鉱山試料の収集・輸入を積極的に行い、石器や粘土製品の原産地推定のための根拠資料となる堆積物・岩石・鉱床などの地球化学データベースの整備を推進した。さらに、新学術領域研究期間をこえて冶金考古学的研究を推進するために、科学分析班のメンバーが研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「古代西アジア研究の国際拠点形成」の申請に関わり、同事業は、2023 年度に採択された。

また、総括班の主導により、各計画研究が 2021 年度と 2022 年度に研究費の繰越しを行い、繰り越した資金を活用して、コロナ禍が収束に向かい海外渡航が可能になった 2021 年の夏季から 2023 年 6 月現在まで、トルコ、イラク（クルド地区）、エジプト、イランの各地で活発な現地調査を行っており、フィールドワークの停滞による研究の遅延はある程度克服された。

「都市文明という全体テーマの解明」に向けての試み：研究組織や研究協力のネットワーク拡充と並行して、「都市とは何か」という大きな命題をより広い視点から考えるために、2021 年度（令和 3 年度）に総括班主導で領域全体研究会を連続して企画した。そこでは、建築学、都市計画学、西アジア史学・地域研究、中国都城研究、アンデス考古学の専門家を講演者に招き、「地中海都市と西アジア都市の比較都市論」、「世界都市史の諸段階と都市の系譜」、「古代西アジアとイスラーム期の都市の連続性」、「唐代都城の成立」、「アンデス文明における都市と神殿」といったテーマを設定し、古代西アジアの枠を超えて、都市について議論する機会を持つことで、より広い時空間において、都市がいかなる自然環境と人間社会を反映して、どの様な形状に作られ変貌していったか、また都市をどの様に定義するか、といった問題を掘り下げて考察する機会となった。

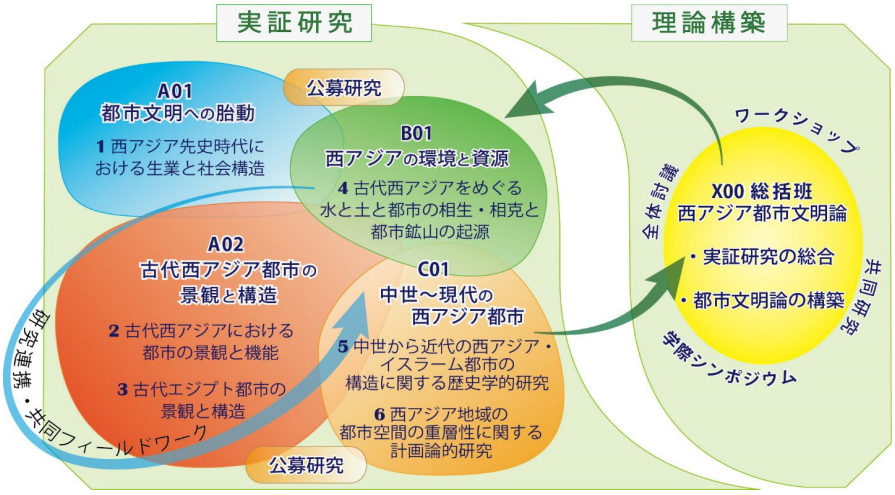
これを継続する形で、2022（令和 4）年度には、計画研究 5 においては、オンラインによる「都市の世界史」講演会を計 10 回開催し、毎回 80～150 名の聴講者が参加し、2023 年度も企画を継続し、アウトリーチにも貢献している。

また、総括班の主導で、2023 年 6 月には 10 名の海外の研究者を招聘して古代唐現在までの西アジアとエジプトの都市を論ずるシンポジウムを開催し、領域の研究成果を反映する 5 巻一組の論集 *Cities in West Asia and North Africa through the Ages*, 5 vols.を 2024－2025 年に Brepols Publisher から出版する準備も整えた。

６　研究目的の達成度及び主な成果

（１）領域設定期間内に何をどこまで明らかにしようとし、どの程度達成できたか、（２）本研究領域により得られた成果について、具体的かつ簡潔に５頁以内で記述すること。（１）は研究項目ごと、（２）は研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で記載すること。なお、本研究領域内の共同研究等による成果の場合はその旨を明確にすること。

本領域は、西アジアにおける都市の誕生、変容、社会的機能、多様性を学際的方法で、通時的・共時的に研究するために、**A01「都市文明への胎動」**、**A02「古代西アジア都市の景観と構造」**、**B01「西アジアの環境と資源」**、**C01「中世～現代の西アジア都市」**の4つの研究項目を設定している。こうした諸項目を公募研究によって補足し、領域全体として西アジア都市の諸相を多角的・歴史的に把握したうえで、**X00「西アジア都市文明論」（総括班）**の主導により、古代西アジア都市文明の特徴と後代への影響を歴史学的に研究し、文化論的に評価し、都市・人間社会・環境の相互関係、都市の類型、といった問題を総合的に論じることを目標とした。以下では、**X00**「総括班」を除く、各研究項目における研究の進捗状況と成果について記す。



(1) 研究目的の達成度

【研究項目A01「都市文明への胎動」】

計画研究１「西アジア先史時代における生業と社会構造」：西アジアの新石器時代は農耕・牧畜による食糧生産が開始された時代として注目されてきたが、その社会自体については、まだ比較的単純なものであったとみる考えが有力であった。しかし、近年の考古学的調査の進展の結果、新石器時代にすでに都市的な社会を先取りするかのような状況が生じていたことが明らかになってきており、本研究では新石器時代にみられるこうした「都市的様相」についてその実態の解明を進めることを目的とした。そして、後の本格的な都市社会との比較を通じて、両者の間の共通点や相違点を浮彫りにすることで、西アジアにおける都市化の過程や古代の都市社会への理解を深めることを目指した。

具体的には、新石器時代を対象に、(1) 社会を統合する装置として重要な役割を果したと考えられる公共建造物の検討、(2) 奢侈品を中心とした工芸生産の発達、長距離交易ネットワークの形成、物資管理の様相の解明、(3) 狩猟採集段階も含めた生業のあり方や食糧貯蔵行為などについて検討し、社会の複雑化の観点から新石器時代の社会の様相の解明に取り組んだ。自らの調査によって得られた一次資料の検討を中心に、広く関連する資料も蒐集し、分析を進め、成果を研究集会等を通じて情報共有し、比較検討を進めることができた。初期の目的は概ね達成し、先史時代の複雑社会とその後の都市社会との比較のための基盤を整えることができた。

【研究項目A02「古代西アジアにおける都市の景観と構造」】

計画研究２「古代西アジアにおける都市の景観と機能」：前3千年紀から紀元後3世紀までの様々な時代を専門とする考古学、文献学、歴史学、地理情報学、環境史などの研究者が参画し、メソポタミアとその周辺における都市の景観と社会的機能の変容を通時的に把握することをめざして、シュメル初期王朝時代、古・中バビロニア時代、中・新アッシリア時代、新バビロニア時代を中心にメソポタミア都市の景観と社会、都市における祭儀、宗教・思想活動、空間認識、都市ネットワークについての研究を文献学と考古学の分野において行った。文献学の分野では、特にシュメル初期王朝時代ラガシュ（ギルス）出土の行政文書研究、古バビロニア時代と中アッシリア時代のテル・タバン出土文書研究（書簡、行政

文書、契約文書）、新アッシリア時代の王碑文、書簡、行政文書の研究、新バビロニア時代の契約文書の研究、セレウコス朝期～アルサケス朝期の天文日誌研究などが活発に行われた。考古学分野では、イラク（クルド自治区）のヤシン・テペ遺跡の発掘が継続的に行われ、新アッシリア時代の都市遺構の発掘が進み、大型建物、副葬品を伴う未盗掘墓、水路跡などが出土し、分析された。また当該地域の同時代の文書資料（王碑文、書簡、行政文書）の研究との関連付けによる都市ネットワークや都市周辺の地理的・歴史的環境についての考察も行われた。メソポタミア都市の特徴の歴史的理解を深める調査と研究が進展し、当初設定した目的は、概ね達成した。

計画研究３「古代エジプト都市の景観と構造」:ナイル川の流域が領域国家として早くから発達したエジプトは、かつて「都市なき文明」といわれたが、近年、考古学的調査・研究の進展に伴い、都市化の諸相が明らかになってきた。この計画研究では、前４千年紀の先王朝時代から古代末期までのエジプト各地の都市の景観とその構造について、都市景観・建築とネットワーク、王権・神殿・墓地と都市構造、政治・行政と社会構造などを主要テーマとして、文書史料と考古資料の双方から通時的・共時的に解明することを目指している。ヒエラコンポリス遺跡（先王朝時代）、ダハシュール北遺跡（中王国時代）、テーベ西岸の複数の高官の墓地（新王国時代）、サッカラ遺跡（初期王朝時代～ローマ支配時代）、中エジプトの都市遺跡アコリス（末期王朝・ヘレニズム時代）における発掘調査を実施した。コロナ禍のために当初予定した計画を完全に達成できなかったものの、公刊されている考古資料、文書、既往研究の収集、人工衛星画像の分析等を行い、これまであまり研究されてこなかったセツルメントパターンと砂漠の道、祝祭と都市、都市の景観、王権シンボルと都市、都市と港、都市と遠距離交易の問題、「居住地」を示す古代エジプト語の用語の問題、都市と墓域の関係などの多数の個別研究が実施され、その成果がまとめられ公刊された。

【研究項目B01「西アジアの環境と資源」】

計画研究４「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」：本計画研究の目的は、西アジアにおける都市文明の勃興から成熟期にいたる時代の、都市を取り巻く環境の変動や都市鉱山化の進行過程を地球環境学的・地球化学的に明らかにすることである。地球科学、岩石学、同位体地球化学、微古生物学、土壌分析化学、古環境学、災害科学の専門研究者が参画し、都市化とともに西アジア各地に生じた資源（土、石材、金属、水など）の都市空間への集中、コミュニケーション網やテクノロジーの発達などを、西アジア各地の堆積物、構造物、人工物の分析によって明らかにし、都市と環境の相互影響関係を地球科学的・物質科学的に解明する。また、これらを通して原産地同定のための基礎データとなる堆積物・岩石・鉱床などの地球化学データベースの整備に貢献することが目的である。コロナの影響で令和 2～3 年度に計画されていた海外調査がキャンセルされ、新規研究試料の入手が不可能になったため計画に遅延が生じたが、輸入済みの試料を用いて研究を継続した。最終年度には、現地の研究協力者の協力により 2 年間に渡って採取していた降水や新たなロガー堆積物試料の輸入が実現し、継続して分析中である。計画の遅延により当初計画よりも規模を縮小せざるを得なかったが、それぞれの計画項目で進捗があり、当初計画の 70%程度が達成できた。

【研究項目C01「中世～現代の西アジア都市」】

計画研究５「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」：西アジア史、中東地域研究、イスラーム建築史等を専門にする研究者が参画し、中世から近世・近代の西アジアの都市を対象とし、(1) 政治的中核都市とその広域ネットワークの地理空間的変容過程、(2) 伝統的都市の空間構造と都市を支える都市文化、(3) 西アジアの内陸部と沿岸部における都市形成と時代性（特に近世・近代）について、「都市」を中心とした地域ネットワークの盛衰、および「イスラーム都市」の構造や機能の解明を試みた。エジプト、イラン、アゼルバイジャン、トルコ等でフィールド調査を行い、メンバー個々人が特定の都市に関して個別に研究を進めるとともに、国内・国際研究会を38回開催して意見交換を行い、比較の視点を滋養し、専門論文ならびに一般向けの論集（後述）を公刊し、当初の目的を果たすことができた。

計画研究６「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」：西アジア地域には、数千年の歴史を誇る都市が多く存在し、地域固有の生活文化の受け皿として、また、多様な文化が共生し重層的に蓄積した文化遺産として意義を持つ。その保全と近代化のあり方を検討することを主目的とした。申請時の 3 名から 2 年目以降はその数を（主要な分担者だけでも）3 倍以上に拡充し、分野的に

建築・都市計画、防災、観光、国際協力といった現代的諸課題を広く扱える陣容を整え、各分野の学術誌、書籍、報告書に成果を発表した。成果の中心はトルコ、シリア、レバノン、ヨルダンの諸都市における都市計画史、文化財保護についての研究だが、比較対象として北アフリカ、中央アジア、ヨーロッパ地域の都市にも注目した。研究の多くが JICA 等の国際協力事業と関連しており、シリア、イラク、トルコ、エジプトで活動を継続している。コロナ禍によって現地調査が限定されたことは否めないが、西アジア都市（ダマスクスとアレッポ）の通時的研究を行い、他分野で共同してこれらの都市に関する翻訳出版事業も完遂した（後述）。研究期間中に、「ベイルート港爆発事故」（2020 年 8 月）、「トルコ・シリア大地震」（2023 年 2 月）といった災害が発生しており、本計画研究の成果を反映した初動的な提言を最終報告書（2024 年度）に盛り込む用意も整った。

（2）これまでの主な成果

【研究項目A01「都市文明への胎動」】

計画研究１「西アジア先史時代における生業と社会構造」：コロナ禍の状況下においても、北イラク、トルコ、アルメニアなどにおいて新石器時代の遺跡の発掘調査を進め、西アジア新石器時代の生業や社会のあり方に関する新たな資料を蓄積した。トルコでの調査では、新石器時代初頭に年代づけられる大規模な公共建造物が検出され、儀礼祭祀に大きな社会的エネルギーが注がれ、社会の複雑化が進展していたことを確認した。この建物はギョベックリ・テペ遺跡（紀元前 1 万年～8 千年）に先行する時期のものであり、集落中に公共建造物が造営される集落構造が、新石器時代初頭にまで遡ることを明らかにした点で大きな意義がある。生業については、野生動物の狩猟が中心であったことが確認され、社会の複雑化が必ずしも食糧生産を基盤として進展したわけではないことが明らかにされた。このほかにも、先土器新石器時代を中心とする資料の集成・分析によって、シンボリズムの発達、奢侈品の特殊生産の発達、海産貝類や黒曜石に代表される長距離交易ネットワークの形成、貯蔵施設の存在から窺われる食糧の大量貯蔵、スタンプ印章を中心とする物資管理の進展など、新石器時代の社会の複雑化について、その実態の解明が進んだ。その一方、農耕社会が確立されたと評価できる土器新石器時代になると、こうした状況に変化が現れることも確認され、その背景には儀礼祭祀の体系も含む社会システムの転換がおこった可能性が示唆された。

公募研究：イラク・クルディスタン自治区のシャフリゾール平原とイラン東部の南ホラーサーン州において都市形成期に相当する遺跡の発掘調査を実施し、長距離流通網の形成や拠点的集落が形成されていく過程の解明が進められた。特に、イランのカレ・クブ遺跡は、ウルク期の交易拠点としては最東端に位置するものであり、その交易網が従来考えられていたよりも大きく東方へ広がっていたことを示す成果として注目される。

トルコ中央部に位置するキュルテペ遺跡は、前 2 千年紀前半に交易都市として繁栄した遺跡であるが、今回実施した発掘調査によってその時期を遡る銅石器時代後期、青銅器時代前期の層を確認することができ、アナトリア高原における都市化の過程を解明するための貴重な資料が得られた。また、青銅器時代の武器についても研究が進められ、西アジアの都市遺跡で出土する武器がヨルダンやサウジアラビアの砂漠地帯でも墓の副葬品として出土することが確認され、都市と砂漠地帯の遊牧社会との関係を解明する手掛かりが得られた。

【研究項目A02「古代西アジアにおける都市の景観と構造」】

計画研究２「古代西アジアにおける都市の景観と機能」：初期王朝時代のラガシュ出土文書にみる供物祭儀の実態、古バビロニア時代タバトゥム市の都市景観、中アッシリア時代タベトゥ市の行政、中バビロニア時代エマル市の行政にみる隣国ヒッタイトの影響、新アッシリア時代の行政首都アッシュル、カルフ、ドゥル・シャルキン、ニネヴェの都市プランとこれらの都市における祭儀伝統の更新と創造、アルサケス朝時代のバビロンにおけるギリシア系住民と「長老会」の関係など、前3千年紀から紀元前後までのメソポタミア都市に関する楔形文字分野での論文を公刊。これによって、メソポタミア都市の景観と構造を通時的に研究する試みが進展した。考古学分野では、ヤシン・テペ（イラク・クルド自治区）の発掘により、新アッシリア時代の有力者に属する大型建物と未盗掘墓が発見された。これらの構築物は、イラク北部ティグリス川中流域のアッシュル市などアッシリア帝国の中心地域にみられるものと同タイプのものであり、この遺跡が新アッシリア帝国の東方辺境の拠点であったことが決定的な形で証明

された。また、楔形文字の献呈碑文の刻まれた青銅製のネックレスを含む多くの金属製品や人骨が発見され、これらの遺物の分析は、この都市の社会的・文化的特徴のさらなる解明につながることは確実である。さらに、運河として用いられたとみられる水路跡も発見されており、当該地域の拠点都市の構造と景観について注目すべき新資料が得られた。こうした考古学調査による成果は、同時代の当該地域についてのデータを含む楔形文字文書の分析と照らし合わせることで、より具体的な復元が可能であり、考古学と文献学の協働による研究を開始し、その成果もすでに部分的に報告された。

公募研究　シリア北東部のテル・タバン遺跡で2010年までに行われた日本隊の発掘により、前18～11世紀まで都市王権の首都として機能した遺構が発掘され、建物、墓、城壁などの主要な構築物と大量の粘土板文書が発見されて注目されてきたが、その防備施設、建物、シャフト墓、水路、土器が詳細に研究され、精緻な文化編年の理解が前進した。また、南レヴァントの後期青銅器時代～初期青銅器時代の都市化の様相が、遺物研究や地理的環境調査によって解明された。

計画研究３「古代エジプト都市の景観と構造」：エジプトで最初の都市化が起こったとされる先王朝時代（前 4 千年紀）ヒエラコンポリス遺跡で発掘された施設の出土遺物の理化学的分析により、施設は最古期のビール醸造施設であることが明らかになった。また、初期王朝～新王国時代のメンフィス・テーベ地域の各種の墓の発掘調査や研究により、墓の分布・規模・形状・碑文が検討され、被葬者の社会的地位が解明された。新王国時代の研究では、テーベ・ネクロポリスの景観と配置、ならびに祝祭都市テーベ全体の中での発掘された墓の位置付けについて、検討が進められ、アメンヘテプ 3 世のマルカタ王宮の景観と構造の研究が行われた。また、2019 年には、アメンヘテプ 3 世治世下の都市テーベに関する国際シンポジウム Thebes under Amenhotep III が開催され、当該期テーベの都市遺跡についての理解が深められた。また、文献史料をもとに、新王国時代のエジプト都市の特徴が研究され、当該期の都市は、権力を示威する空間として宗教、王権、行政、外交と結びつき、これらを支える人々が集住して構成されたことが示された。古代エジプト語における「居住地」を表わす種々の語彙についての研究では、古代エジプト人の「居住地」の概念が整理されている。末期王朝・ヘレニズム時代については、中エジプトのアコリスとデルタ地帯のメンフィスならびにコム・アル＝ディバーゥで、発掘やリモートセンシング調査が進展し、都市あるいは居住地の景観とその変遷が解明された。

【研究項目B01「西アジアの環境と資源」】

計画研究４「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」：（1）シュメル都市国家群の揺籃の地であるイラク南部で約7,000年前に生じた海進時に堆積した海成堆積物に達する50本を超える最深5mの氾濫原堆積物ロガー試料を採取し、粘土製品の原産地同定のための資料となる地球化学データベース（合計250試料の主要・微量元素及び70試料のSr-Nd-Pb同位体比：XRFとICP質量分析システムを使用）を構築した。（2）スレイマニア博物館等収蔵の粘土板の胎土100試料の主要及び微量化学組成、Sr-Nd-Pb同位体比のデータベースを構築し、文書から推定される出土地との一致を確認した。氾濫原堆積物と粘土板胎土には、銀などの異常な濃集が確認され、都市鉱山化過程を理解するための強固な基礎を築いた。（3）イラク北東部のヤシン・テペ遺跡の未盗掘墓残土に含まれる金属粒子や現代の銅鉱山試料を用い、銅同位体比を指標とした銅鉱石の種類・成因・産地を推定する手法を検討、製錬スラグから製鉄技術の成熟度を分析した。（4）ジャルモ遺跡から出土した黒曜石化学組成を測定し、それに基づいた層序を確立した。（5）イラン北西部と周辺地域における火成活動とテクトニクス、鉱床成因、古環境復元に関わる現地調査、試料採取、化学分析・年代測定を実施し、同位体分析により鉱床形成、トラバーチン（石灰質化学沈澱岩）湧水と第四紀火成活動の関係を分析して、30編の国際誌論文を公表し、原産地推定のための岩石・堆積物・水についてのデータベースを構築した。(5）氾濫原堆積物ロガー試料（上記）を用いてメソポタミア下流域ウルク近郊においてヒプシサーマル期にいたる完新世前期の土壌堆積速度は現在の10倍ほど速かったことを明らかにし、ティグリス川水系上流のジャルモ遺跡では侵食地形の地表面露出年代が、斜面の下方に向かって若返る結果を得て、古景観復元に道筋を付けた。（6）Umm al-Aqarib遺跡周辺のバルハン砂丘について、TL年代測定、粒度、気象データ、衛星画像の解析から移動速度を考察し、乾燥化とともに砂丘が急速に発達・移動することを示した。（7）イランの10都市で毎月採取した降雨試料を輸入し、降水の化学的特徴とその変動、人為起源物質の影響などの評価に道を開いた。

公募研究：イラン北西部･西アゼルバイジャン州タフテ･ソレイマンにおいて連続的にトラバーチン試料を採取

し、数千年間の古気候復元を行った。また、トラバーチン周辺の湧水分析を行い、湧水に石灰岩溶解成分に加えて火成活動に起因する成分が含まれていることを明らかにした。さらに、現在のイランの環境の状態を把握するため、クルディスタン大学にて大気エアロゾルの捕集・分析を行い、冬季は^{14}C濃度が低く、石炭・石油の燃焼や自動車の排気ガス起源炭素の寄与が大きく、春季は^{14}C濃度、カルシウムやアルミニウムの濃度が大幅に増加しており、イラクなど西からの砂塵粒子の飛来量が増加し、環境に影響を与えていることが明らかにした。

【研究項目C01「中世～現代の西アジア都市」】

計画研究５「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」：多様な宗教共同体を内包した「イスラーム都市」の重層的・多面的な構造から、イスラーム時代の西アジア都市と都市文明の特徴を考察することを目的とした計画研究 5 の成果として、まず、7 世紀のイスラーム勃興から 20 世紀初頭にいたるまでの西アジアの諸都市（東はアフガニスタンから西はエジプトまで）を対象とした一般向けの論集『都市からひもとく西アジア：歴史・社会・文化』（守川知子編、勉誠出版）を刊行した。15 本の論考（うち 3 つは港市に関するコラム）は、いずれも文献史料・絵図・地図の分析検討により、多様な人々が暮らす都市社会や、市壁・建造物・街区といった都市の構造やその機能面を多角的に検証し、西アジア都市の「輪郭」を明らかにした。

バグダード、ササン朝期の都市、アフロ・ユーラシア都市、北アフリカ都市、都市の重層化、イランガージャール朝、中世西アジア都市をテーマに 7 回の国際研究集会を主催し、ササン朝期から近代までの西アジア都市と北アフリカ諸都市との比較研究や、中世期の西アジア都市、近代のイラン諸都市などに特化して議論するとともに、国際交流および研究成果の国際発信に努めた。

公募研究：（1）近世・近代のタブリーズにおけるイラン王権とアルメニア教徒との関係のアルメニア教徒側からの請願書に基づく分析、（2）マムルーク時代ワクフ文書の分析による都市と墓地の研究、（3）同時代のカイロの水インフラ整備と都市の拡大過程の研究、（4）15 世紀末ティムール朝治下のヘラートで活動したスーフィー教団シャイフの書簡の分析による政権と教団関係が解明、などの研究が行われ、成果を上げた。

計画研究 6「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」：　シリアについては、ダマスクス及びアレッポを中心に都市計画史研究の進捗をみた。番匠谷堯二による計画論が、単なる道路導入でなく、ヘレニズム時代に起源を持つグリッド型都市基盤の再構築を目指したものであることが、パリやアルジェリアにおける進化型住宅の計画の分析を踏まえて解明された。交通調査と市街地拡張計画の分析から当時の交通圧力の甚大さが浮き彫りになると共に、観光ルート「古典古代の道」はオールド・ダマス内の古代遺跡を再評価する都市政策の結果であることを示し、復興展望の見地から、国際協力による平和構築アプローチの有効性が示唆された。更に、シリアの伝統都市を描いた名著ロス・バーンズ『ダマスクス』・『アレッポ』の翻訳出版を多分野の共同事業として実施し、完遂した。

トルコ・カッパドキアでは、聖シメオン教会やウズムル教会の遺跡保全が進捗をみた。温度変化と気象モニタリング、土壌分析から岩窟の劣化要因を解析し、パーミエイト処理をすることで劣化速度を遅らせることが出来ることが判明した。また、世界遺産的価値のある内部壁画についてもプラスター層の処置による保全手法の有効性が明らかとなった。

レバノンについては、内戦復興で知られるベイルート・ダウンタウンの活性化要因が解明され、ヨルダンではマグタス教会を事例とするグローバルな観光モビリティの実相が解明された。また、比較対象地域として、中央アジア、ヒヴァの 19 世紀におけるイスラーム都市的構成原理が一次資料に基づき解明された。また、ローマ時代の遺構を含む都市建築を活用して復興されたマルセイユにおけるプイヨンの都市計画業績とムーア建築を取り入れたアルジェの 3 地区の形成過程が検証された。

公募研究：カッパドキアの教会の劣化の要因の一つである教会外壁への風位の影響の詳細分析、バレンシアの伝統的都市形態と灌漑システム、水路の形態のとの相互作用とその歴史的変容、アンカラとイスタンブールにおけるユルバニストの計画実績の解明、カイロ近郊ヘリオポリスにおけるマルセルの都市計画の特徴の分析が行われ、成果を上げた。

７　研究発表の状況

研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で、本研究領域により得られた研究成果の発表の状況（主な雑誌論文、学会発表、書籍、産業財産権、ホームページ、主催シンポジウム、一般向けアウトリーチ活動等の状況。令和５年６月末までに掲載等が確定しているものに限る。）について、具体的かつ簡潔に５頁以内で記述すること。なお、雑誌論文の記述に当たっては、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、研究代表者（発表当時、以下同様。）には二重下線、研究分担者には一重下線、corresponding author には左に＊印を付すこと。

以下は、論文・著書のうち、特に本領域研究に係わる案件を抜粋して掲載。

【研究項目A01「都市文明への胎動」】

計画研究１「西アジア先史時代における生業と社会構造」

*Tsuneki, A./Watanabe, N./Anma, R./Jammo, S./Saitoh, Y./Saber, S.A., "Preliminary Report of the Charmo (Jarmo) Prehistoric Investigations, 2022," *Al-Rāfidān* 46 (2023), 1–34.

Jammo, S./Tsuneki, A. "Freeing the dead from their homes: A new relationship between the living and the dead in the Kerkh Pottery Neolithic cemetery," in: D. Ackerfeld/A. Gopher (eds.) *Dealing with the Dead: Studies on Burial Practices in the Pre-Pottery Neolithic Levant,* Berlin, 2022, 317–334.

*Kondo, O./Tashiro, M./Miyake, Y. "Human skeletal remains from Hasankeyf Höyük, a sedentary hunter-gatherer site in southeast Anatolia," *Anthropological Science* 130 (2022), 121–134.

*Maeda, O./Carter, T./Moir, R., "Change and Continuity in the Lithic Industry of Hasankeyf Höyük, a Late 10th Millennium cal. BC Site on the Upper Tigris," in: Y. Nishiaki et al. (eds.), *Tracking the Neolithic in the Near East. Lithic Perspectives on Its Origins, Development and Dispersals.* Leiden, 2022, 453–468.

*Itahashi, Y./Stiner, M.C./Erdal, O.D./Duru, G./Erdal, Y.S./Miyake, Y. /Güral, D./Yoneda, M./Özbaşaran, M., "The impact of the transition from broad-spectrum hunting to sheep herding on human meat consumption: Multi-isotopic analyses of human bone collagen at Aşıklı Höyük, Turkey," *Journal of Archaeological Science*, 136 (2021), 1–10.

Arimura, M., *The Neolithic Lithic Industry at Tell Ain El-Kerkh*, Oxford, 2020.

常木 晃「西アジア新石器時代のメガサイト再考」『西アジア考古学』21 (2020), 83–94.

久田健一郎「地質学からみたテル・エル・ケルク遺跡」『西アジア考古学』21 (2020), 95–104.

*Hongo H./Arai, S./ Takahashi, R./ Gündem, C.Y., "Transition to Food Production Suspended: A Remarkable Development in the Eastern Upper Tigris Valley, South Anatolia," in: J. Peters et al. (eds.), *Animals: Cultural Identifiers in Ancient Societies? Proceedings of the 2016 International Symposium*, Munich, Documenta Archaeobiologiae 15, Rahden, Westf., 2020, 155–172,

Price, M./Hongo, H., "The Archaeology of Pig Domestication in Eurasia: Methods, Models, and Case Studies," *Journal of Archaeological Research* 28 (2020), 557–615.

*Tsuneki, A. et al., "Landscape and Early Farming at Neolithic Sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: A Case Study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan," *Paléorient* 45/2 (2019), 33–51.

Maeda, O., "Stone Balls from Salat Cami Yanı and Hasankeyf Höyük, Neolithic Sites on the Upper Tigris," in: S. Nakamura et al. (eds.), *Decades in Deserts*, Tokyo, 2019, 261–268.

*Itahashi Y./Miyake, Y. et al., "Amino Acid 15N Analysis Reveals Change in the Importance of Freshwater Resources between the Hunter-gatherer and Farmer in the Neolithic Upper Tigris," *American Journal of Physical Anthropology* 168 (2019), 676–686.

公募研究　（研究項目**A01**）

*Odaka, T./Maeda, O., et al., "Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022)," *Ancient Civilizations and Cultural Resources* 1 (2023), 1–22.

*Kharanaghi, M.H.A./Abe, M., "The Eastern Iran Prehistoric Archaeological Project: The Second Season of Archaeological Excavation at Kale Kub, Southern Khorasan", *Journal of Archaeological Studies* 14 (2022), 133–152.

紺谷亮一/F. クラックオウル「キュルテペ遺跡の都市性とその評価」『西アジア考古学』23 (2022), 137–144.

*Odaka, T./Maeda, O./Shimogama, K./Hayakawa, Y.S./Nishiaki, Y./Mohammed, N.A./Rasheed, K., "Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019," *Neo-Lithics* 20 (2020), 53–57.

Uesugi, A./Dangi, V., "Change in the Mortuary Practices from the Urban Indus Period to the Post-Urban Indus Period in the Ghaggar Basin with a Focus on the Ceramic Evidence from Farmana (Seman-6) and Bedwa-2," in: S.V. Rajesh et al. (eds.), *The Archaeology of Burials: Examples from Indian Subcontinent*, 2019, 1–24.

【研究項目A02「古代西アジアにおける都市の景観と構造」】

計画研究 2「古代西アジアにおける都市の景観と機能」

Yamada, M., “The Role of Women in Assyrian Foreign Policy,” in: N. Brisch/F. Karahashi (eds.), *Women and Religion in the Ancient Near East and Asia*, Boston/Berlin, 2023, 45–62.

Garcia-Ventura, A./Karahashi, F., “Socio-Economic Aspects and Agency of Female Maš-da-ri-a Contributors in Presargonic Lagash,” in: N. Brisch/F. Karahashi (eds.), *Women and Religion in the Ancient Near East and Asia*, Boston/Berlin, 2023, 25–44.

Yamada, S., “To Be Assyrian Residents: A reflection on the integration of the subjugated people into the Assyrian Empire,” in: J. Bach and S. Fink (eds.), *The Neo-Assyrian King as a nodal point of Neo-Assyrian Identity*, Kasion 8, Zaphon Verlag, 2022, 273–294.

Hogue, T. “For God, King, and Country: Cult and Territoriality in the Iron Age Levant,” *Levant* 54/3 (2022), 347-358.

Mitsuma, Y. “The Semi-Circular Theatre in Seleucid and Arsacid Babylon,” *Performance Spaces and Stage Technologies*, Bielefeld, 2022, 33–45.

Hogue, T. “With Apologies to Hazael: Theater, Spectacle, and Counter-monumentality at Tel Dan,” *Hebrew Bible and Ancient Israel* 10/3 (2021), 243–256.

Hogue, T., "Thinking Through Monuments: Levantine Monuments as Technologies of Community-Scale Motivated Social Cognition,” *Cambridge Archaeological Journal* 31/3 (2021), 401–417.

Watai, Y., An Administrative Text from the Neo-Babylonian Period found in the Collection of the Hirayama Ikuo Silk Road Museum, Japan, *Archiv für Orientforschung* 54 (2021), 406–-412.

春田晴郎「西アジアの古代都市」『岩波講座　世界歴史 3』岩波書店，2021，163–184.

Shibata, D./Yamada, S. (eds.), *Calendars and Festivals in Mesopotamia in the Third and Second Millennia BC*, Studia Chaburensia 9, Wiesbaden, 2021, 254pp.

Yamada, S., “The conquest and reorganization of the land of Zamua / Mazamua in the Assyrian Empire,” in: S. Hasegawa/K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires*, Studia Chaburensia 8, Wiebaden, 2020, 167–193.

Konstantopoulos, G, “The Bitter Sea and the Waters of Death: the Sea as a Conceptual Border in Mesopotamia,” *Journal of Ancient Civilizations* 35 (2020), 171–198.

Nishiyama S., “Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire,” Studia Chaburencia 8, Wiesbaden, 2020, 45–72.

Yamada, S., “Names of Walls, Gates, and Palatial Structures of Assyrian Royal Cities: Contents, Styles, and Ideology,” *Orient* 55 (2020), 87–104.

Karahashi, F., “On the Cultic Aspect of the ‘Reform of Urukagina’: Some Changes in the Festival of the Goddess Baba,” *Orient* 55 (2020), 63–70.

Yamada, S., “Neo-Assyrian Trading Posts on the East Mediterranean Coast and “Ionians”: An Aspect of Assyro-Greek Contact,” in: I. Nakata et al. (eds.) *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa*, Tokyo, 2019, 221–235.

Yamada, S., “*sal*(*a*)*hum* in the Old Babylonian Letters and the Urban Landscape of Upper Mesopotamia” in: P. Abrahami et al. (eds.), *Sur l’art, sur l’histoire et sur la vie, FS O. Rouault*, Oxford, 2019, 38–49.

Shibata, D., “The Gods of Ṭabetu during the Middle Assyrian Period and their Genealogy,” in: G. Chambon et al. (eds.), *De l’argile au numérique, FS D. Charpin*, Paris, 2019, 943–975.

Yamada, M., “The ‘Overseers of the Land’ in the Emar Texts,” in: I. Nakata et al. (eds.), *Prince of the Orient*, Tokyo, 2019, 193–210.

Mitsuma, Y., “The Relationship between Greco-Macedonian Citizens and the ‘Council of Elders’ in the Arsacid Period: New Evidence from Astronomical Diary BM 35269 + 35347 + 35358,” in: J. Haubold et al. (eds.), *Keeping Watch in Babylon: The Astronomical Diaries in Context*, Leiden, 2019, 294–306.

西山伸一/Hama Abdulla, H./山田重郎/沼本宏俊/常木晃「アッシリア帝国東部辺境を掘る：イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト第 3 次（2018 年）」『第 26 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 2019, 109–113.

Karahashi, F., “Female Servants of Royal Household (ar_3-tu munus) in the Presargonic Lagash Corpus,” in: A. Garcia-Ventura (ed.), *What’s in a Name?: Terminology Related to the Work Force and Job Categories in the Ancient Near East,* Münster, 2019, 133–146.

計画研究 3「古代エジプト都市の景観と構造」

Kawai, N., “The Lioness Goddess Statuary from the Rock-Cut Chambers at Northwest Saqqara and Their Cult in Middle Kingdom Egypt,” in: N.M. Brisch/F. Karahashi (eds.), *Women and Religion in the Ancient Near East and Asia*, Boston/Berlin, 2023, 303–338.

長谷川奏「ナイルの水辺に息づいた古代世界－文明の重層性に対するアプローチー」東日本国際大学紀要『研究東洋』13 (2023), 81–93.

Kawai, N., “The Time of Tutankhamun. What New Evidence Reveals,” *Scribe: The Magazine of the American Research Center in Egypt* 9 (2022), 44–53.

Tazawa, K., “Transforming Goddesses in Ancient Egypt,” in: N. Kawai/B.G. Davies (eds.), *The Star Who Appears*

in Thebes: Studies in Honour of Jiro Kondo, 2022, 491–499.
矢澤健/米山由夏/石崎野々花「古代エジプト中王国時代のセトルメント・パターンと砂漠の道」『西アジア考古学』23 (2022), 19–34.
山崎世理愛「エジプト中王国時代における器物奉献儀礼の変容とその社会的背景」『オリエント』65/1 (2022), 1–17.
Baba, M., "An intact pit–burial discovered at Dahshur North," in: N. Kawai/B. Davies (eds.), *The Star Who Appears in Thebes: Studies in Honour of Jiro Kondo*, 2022, 43–51.
中野智章「ある古代エジプト王像に彫られた文様の記憶」周藤芳幸（編）『古代地中海世界と文化的記憶』山川出版社, 2022, 87–113.
Suto, Y., "Legal Ethnic Designations in Akoris in the Second Century BCE," *Preliminary Report Akoris 2021*, Nagoya, 2022, 14–17.
Hasegawa, S./Nishimoto S., "Recovering the landscape of the waterfront at Lake Idku: Archaeological survey at Kom el-Diba'" in: A. Wahby/P. Wilson (eds.), *The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)*, London, 2022, 55–64.
Suto, Y., "Social Resilience and Organization of Knowledge in Ptolemaic Egypt," in: Y. Suto (ed.) *Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World*, Phoibos Verlag 2021, 187–198.
Kondo, J./Yoshimura, S./Kawai, N./Takahashi, K./Fukuda, R., "Preliminary Report on the Thirteenth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition," *Journal of Egyptian Studies* 27 (2021), 3–17.
Wang, J./Friedman, R./Baba, M., "Predynastic beer production, distribution, and consumption at Hierakonpolis, Egypt," *Journal of Anthropological Archaeology* 64 (2021), 101347–101347.
Yoshimura, S./Yazawa, K./Kashiwagi, H./Takahashi, K./Yonehama, Y./Yamazaki, S./Ishizaki, N./Arimura, M., "A Brief Report of the Excavation at Dahshur North: Twenty-Sixth Season, 2019," *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association* 9 (2021), 17–44.
内田杉彦「新王国時代の文字資料にみられる「居住地」の呼称について」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究２』2020, 145–150.
西本真一「マルカタ都市王宮における景観と構造」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究２』2020, 157–159.
近藤二郎「古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と構造」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究１』2019, 107–112.

公募研究（研究項目A02）

沼本宏俊「シリア、テル・タバン出土、中アッシリアの排水溝と貯水遺構」『都市文明の本質4: 研究成果報告2022年度』2023, 35–49.
長谷川修一「青銅器時代・鉄器時代移行期の南レヴァントにおけるエスニック・アイデンティティ出現」—「イスラエル」出現を手がかりに—」『古代文化』73 (2022), 73–84.

【研究項目B01「西アジアの環境と資源」】

計画研究4「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

黒澤正紀/西山伸一/池端慶「イラク北東部鉄器時代遺跡の製鉄関連スラグ」『都市文明の本質 4: 研究成果報告 2022 年度』2023, 131–146.
安間了/申基澈/渡辺千香子/辻彰洋/佐野貴司/齋藤有/中野孝教/横尾頼子/小泉龍人/Altaweel M./Marsh A./Hama Hashim/Rasheed Kamal/Jotheri Jaafar「スレマニ博物館所蔵の楔形文書粘土板胎土の化学組成」『都市文明の本質 4: 研究成果報告 2022 年度』2023, 147–152.
Davoudian, A.R./Bendokht, M./Shabanian, N./Azizi, H./Asahara, Y./Neubauer, F./Genser, J., "Geochronology and geochemistry of the Ediacaran orthogneisses from the North Shahrekord (Sadegh-Abad), Sanandaj-Sirjan Zone: Insights into magmatic evolution of the Iranian basement," *Geological Journal* 57 (2022), 2788–2811.
安間了/Jaafar Jotheri「堆積物柱状試料と地形からみるメソポタミア下流域の堆積環境の変遷と塩害,」山田重郎編『都市文明の本質 4: 研究成果報告 2021 年度』2022, 154–171.
下岡順直/安間了/Jaafar Jotheri/中川清隆/長島秀樹/平田英隆「Tell umm al-Aqarib の三日月型砂丘のルミネッセンス年代測定と風向風速解析：古代メソポタミア都市遺跡を呑み込む砂丘列の移動を解明する」山田重郎 (編)『都市文明の本質 4：研究成果 2021 年度』2022, 173–185.
黒澤正紀/池端慶/安間了/西山伸一「ヤシン・テペ遺跡出土の腐食青銅片の鉱物・化学的特徴」『都市文明の本質 3: 研究成果報告 2021 年度』2022, 187–195.
Kurosawa, M./Semmoto, M./Shibata, T., "Mineralogical characterization of early Bronze Age pottery from the Svilengrad–Brantiite site, southeastern Bulgaria," *Minerals* 12 (2022), 79. doi.org/10.3390/min12010079
Azizi, H./Asahara, Y./Minami, M./Anma, R., "Sequential magma injection with a wide range of mixing and mingling in Late Jurassic plutons, southern Ghorveh, western Iran," *Journal of Asian Earth Sciences* 200 (2020), 104469.
Sepahi, A. A./Ghoreishvandi, H./Maanijou, M./Maruoka, T./Vahidpour, H., "Geochemical description and sulfur isotope data for Shahrak intrusive body and related Fe-mineralization (east Takab), northwest Iran," *Island Arc*

29 (2020), e12367.
黒澤正紀/池端慶/安間了/西山伸一「ヤシン・テペ遺跡の石室内の金属濃集堆積物の分析」『都市文明の本質 3: 研究成果報告 2020 年度』2021, 205–215.
安間了/常木晃/三宅裕「イラク国北部 Jarmo 遺跡およびトルコ国南東部 Hasankeyf 遺跡出土の石器材黒曜石の化学組成と原産地推定」『都市文明の本質２: 研究成果報告 2019 年度』2020, 197–204.
黒澤正紀/池端慶/荒川洋二「古代西アジアにおける金属利用と都市鉱山の起源に関する基礎的検討」『都市文明の本質２: 研究成果報告 2019 年度』2020, 173–180.
横尾頼子/浅井公輔/堀井彩衣/濱口弘平/申キチョル/安間了/メラバニ・シバ 「イラン８都市の月別降水の化学組成」『都市文明の本質２: 研究成果報告 2019 年度』2020, 181–186.
中野孝教「アイソスケープと考古学」『都市文明の本質２ ：研究成果報告 2019 年度』2020, 163–172.
堀川恵司/南雅代/安間了「イラン北西部アリ・サドル洞窟のつらら石の U/Th 年代, ^{14}C 年代, 炭素・酸素安定同位体比」『都市文明の本質２ ：研究成果報告 2019 年度』2020, 187–195.
Tsuneki, A./Rasheed, K./Watanabe, N./Anma, R./Tatsumi, Y./Minami, M., “Landscape and Early Farming at Neolithic Sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: A Case Study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan,” *Paleorient* 2 (2019), 33–51.
Shitaoka, Y./Noguchi, A./Mallah, Q.H./Veesar, G.M./Shaikh, N./Kondo, H., “Optically Stimulated Luminescence Dating of Dune Sand Sediments in the Western Margin of the Thar Desert at Sindh, Southern Pakistan,” 『都市文明の本質１ ：研究成果報告2018年度』2019, 155–160.
淺原良浩/南雅代/ラズーリ・ハディ／アジジ・ホセイン「西アジアの古環境復元に向けて：イラン北西部ザグロス山脈に分布する石灰質化学沈殿岩の現地調査報告」『都市文明の本質１: 研究成果報告 2018 年度』2019, 143–148.

公募研究（研究項目B01）
Takahashi, H.A./Minami, M./Aramaki, T./ Handa, H./Saito-Kokubu, Y./Itoh, S./ Kumamoto, Y., “A Suitable Procedure for Preparing of Water Samples Used in Radiocarbon Intercomparison,” *Radiocarbon* 61 (2019), 1879–1887.

【研究項目C01「中世～現代の西アジア都市」】

計画研究 5「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」
Morikawa, T. (ed.), *Acta Asiatica* (*Bulletin of the Institute of Eastern Culture*) No. 123 <Special Issue: Armenian Merchants and Their Communities in Early Modern Eurasia>, The Tōhō Gakkai, Tokyo, 2022.
守川知子「聖都アルダビールとサファヴィー朝下のサフィー廟」『アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 1』2022, 213 –230.
Tor, D.G./Inaba, M., *The History and Culture of Iran and Central Asia: From the Pre-Islamic to the Islamic Period*, University of Notre Dame Press, 2022.
Yamaguchi, A., “The Kurdish Frontier under the Safavids,” in: R. Matthee (ed.), *The Safavid World*, London, 2022, 556–571.
稲葉穣『イスラームの東・中華の西：七～八世紀の中央アジアを巡って』臨川書店, 2022.
守川知子(編)『都市からひもとく西アジア：歴史・社会・文化』勉誠出版, 2021.
Fukami, N., “Public space in premodern Cairo from analyzing map, using the historical maps in Napoleon's Description de l’Egypte,” *Public Space, Public Sphere, and Publicness in the Middle East*, 32*,* Sophia University, 2021, 76–88.
Fukami, N., “Chapter 5: Regional Diversity and Sustainability of Megacities in Global Historical Perspective,” *Living in the Megacity: Towards Sustainable Urban Environments*, Springer, 2021, 67–104.
守川知子「近世イランの王都の中のキャラバンサライ：『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に」『都市文明の本質２: 研究成果報告 2019 年度』2021, 207–221.
中町信孝「マムルーク朝時代のアインターブ：アイニー兄弟の「自己語り」を通して」『都市文明の本質２: 研究成果報告 2019 年度』2020, 223–234.
Inaba, M., “The Narratives on the Bāmiyān Buddhist Remains in the Islamic Period,” in: B. Auer/I. Strauch (eds.), *Encountering Buddhism and Islam in Premodern Central and South Asia*, Berlin, 2019, 75–96.
守川知子「サファヴィー朝下のイスファハーンと新ジュルファー：近世西アジア都市の非ムスリム街区」『都市文明の本質１: 研究成果報告 2018 年度』2019, 163–172.
深見奈緒子「初期イスラーム時代の都市からの覚書」『都市文明の本質 1: 研究成果報告 2018 年度』2019, 173–189.

計画研究 6「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」
Taniguchi, Y.,/Masuda, K./Mansour, S./Shehata, M./Narita, A./Koga, M./Nishisaka, A./Kamal, H./Gehad, B., “Conservation of the Ini-Sneferu-Ishetef wall paintings from the Old Kingdom: A joint project between Japan and Egypt,” *Proceedings of The 19th ICOM-CC Virtual Triennial Conference, Beijing 2021, on the theme of Transcending Boundaries: Integrated Approaches to Conservation*, 2021.
松原康介「脱植民地期アルジェのビドンヴィル事業を巡る居住実践に関する研究（その２）： フェルナ

ン・プイヨンのアルジェ三地区におけるムーア建築的特徴について」『日本建築学会計画系論文集』86 (790), 2799–2810.
Matsubara K., “Some learnings Gyoji Banshoya acquired from the spatial composition of the ancient shantytown of Mahieddine, in 1950's Algiers: Research on dwelling practice around the “bidonville (shantytown)” project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1,” *Japan Architectural Review* 4, 2021.
Alkazei, A./Matsubara, K., “Post-conflict reconstruction and the decline of urban vitality in Downtown Beirut, *International Planning Studies* 26 (2020), 267–285.
Muto, A./Saraiva, R., “Assessing Context-Specific Peacebuilding Approaches in Contemporary Armed Conflicts: From High-Level Mediation to Middle-Out Linkage in Syria and from Adaptive Mediation to Nationally-Owned Peacebuilding in Mozambique,” *Asian Journal of Peacebuilding* 8/2 (2020), 241–264.
岡野圭吾/松原康介/谷口守「ダマスクスにおける地域特性を踏まえた交通行動の実態分析－JICA パーソントリップデータを用いて－」『都市計画報告集』19 (2020), 125–130.
松原康介「ダマスクス 1968 年計画におけるヘレニズム基盤の再構築事業」『都市計画論文集』54、2019, 630–637.
川本智史「船が買いたい！前近代イスタンブルと海上交通」『都市史研究』6 (2019), 74–83.
Shioya, A., “The Treaty of Ghulja Reconsidered: Imperial Russian Diplomacy Toward Qing China in 1851,” *Journal of Eurasian Studies* 10/2 (2019), 147–158.
*Taniguchi, Y./ Iba, C./Koizumi, K./Temur, H./Yalçınkaya, U./Açıkgöz, F./Gulyaz, M., “Scientific Research for Conservation of Rock Hewn Church, Üzümlü (Cappadocia) in 2016: Chapel of Niketas the Stylitis in Red Valley,” *36. Araştırma Sonuçlarıı Toplantısı 3. Cilt 40th International Symposium of Excavations, Surveys and Archaeometry 07-11 May 2019, Çanakkale*, 2019, 529–550.
松原康介「アルジェ・植民都市計画の変遷－モダニズムの地域性－」『都市史研究』5 (2018), 55–65.
川本智史「13～15 世紀アナトリア諸王朝の宮殿における高層建造物とその展開」『2019 年度日本建築学会学術講演梗概集』2019, 379–380.
Alkazei, A./Matsubara, K., “The Impact of Reconstruction Planning on Urban Vitality: The Case of Downtown Beirut after the Lebanese Civil War,” *Summaries of Technical Papers of Annual Meeting 2019,* Architectural Institute of Japan, 2019, 747–748.
松原康介「ジョルジュ・キャンディリスの計画論「進化型住宅」における番匠谷堯二の貢献について」『2019 年度日本建築学会学術講演梗概集』2019, 943–944.
塩谷哲史「19 世紀コングラト朝ヒヴァ・ハン国の君主像」野田仁/小松久男(編)『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社, 2019, 118–139.
谷口陽子「破壊されたバーミヤーン遺跡の再生と文化的アイデンティティ」『世界と日本の考古学：オリーブの林と赤い大地：常木晃先生退職記念論文集』六一書房, 2020, 515–532.
川本智史「国父のページェント：ムスタファ・ケマルと共和国初期アンカラの儀礼空間」小笠原弘幸(編)『トルコ共和国 国民の創成とその変容：アタテュルクとエルドアンのはざまで』九州大学出版会, 2019, 97–124.
川本智史「他王朝による征服：オスマン朝とイスタンブルの復興」都市の危機と再生研究会編『危機の都市史：災害・人口減少と都市・建築』吉川弘文館，2019, 84–105.

公募研究（A04）

内田隆介/伊庭千恵美「カッパドキアの岩窟教会とそこに繁殖する地衣類に対し風雨が与える影響の考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集』 60 (2020), 253–256.
三田村哲哉「仏領におけるユルバニスムの萌芽と興隆：西アジア都市の位置づけ」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』22 (2020)，67–79.
Ikemoto, F./Sakura, K./Astaburuaga, A.T., “The Influence of Historical Irrigation Canals on Urban Morphology in Valencia, Spain,” *Land* 10 (2021), 738.
三田村哲哉「イスタンブールの都市改良とアンリ・プロストの文書選集に関する考察」『建築歴史・意匠』2020, 627-628.
阿部尚史「ナジャフコリー・ハーン家のトユールー：19 世紀イラン土地制度の実相」『お茶の水史学』65 (2022)，1–33.
杉山雅樹「15 世紀のヘラートにおける聖者墓群の形成—イードガーフを事例として—」『都市文明の本質 3：2020 年度報告書』2021，245–254.

——

領域ホームページ（http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/index.html）：

「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」（各年度の研究会・シンポジウム・研究会［2018 年度に 19 回、2019 年度に 29 回，2020 年度に 24 回, ］のプログラム、ならびに研究論文・ノートを掲載）

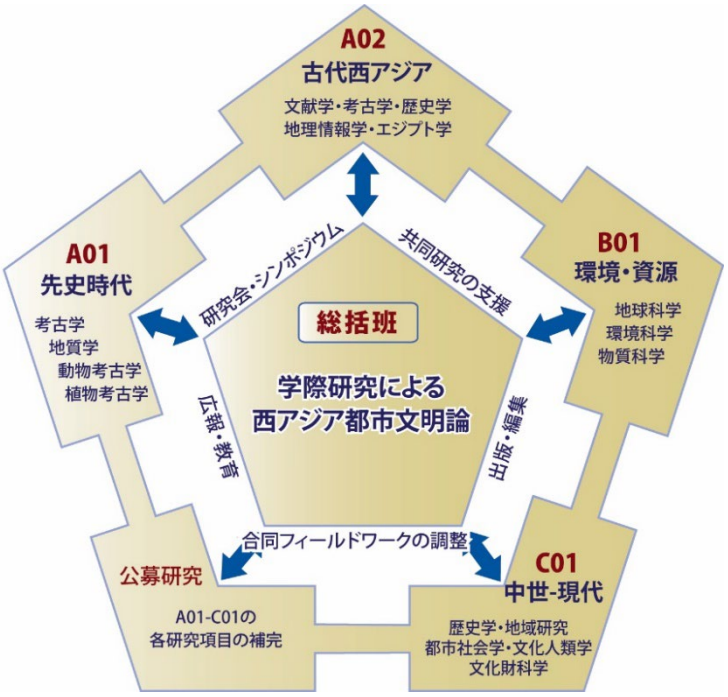
領域年次報告書：

山田重郎編『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1 –5：研究成果報告 2018–2022 年度（2019–2023; 各全 232 頁，302 頁，346 頁，322 頁，306 頁）

８　研究組織の連携体制

研究領域全体を通じ、本研究領域内の研究項目間、計画研究及び公募研究間の連携体制について、図表などを用いて具体的かつ簡潔に１頁以内で記述すること。

本領域研究では、A01（先史時代）、A02（古代西アジア）B01（環境・資源）、C01（中世・現代）の４つの研究項目（そのうち A02 と C01 にはそれぞれ 2 つの計画研究があり、全部で６つの計画研究が含まれる）を、総括班がハブとなってまとめた。総括班は、研究項目間・計画研究間の連携を促進・支援するとともに、全体を統括して、「西アジア都市文明論」の構築を見据えた研究成果の統合を図った。



ここでの研究者間の連携は、合同研究会や全体シンポジウムの参加にとどまらず、文理合同でおこなうフィールドワークの実施や化学分析機器、測量器、撮影機器などの相互利用、多分野の研究者による共著論文や書籍の作成といった種々の「協働」による調査・研究活動を含んでいる。ここでは、各研究者の研究成果を領域代表者が「取りまとめる」一方通行の連携ではなく、多くの研究者が相互に参画して共同の研究計画を練り、それを遂行し、互いにフィードバックを得ながら研究を発展させる全領域的協働としての連携をめざした。

学際的手法によって西アジア都市の諸相を通時的・共時的に解明しようとする本領域を補完する公募研究は、以下の 3 つの主要分野からなる：

（1）本領域研究の中心的課題として含まれなかった時代や地域についての都市研究・地域研究。
（2）都市文明論や都市類型論など理論構築の強化に貢献する研究。
（3）本領域の物質分析分野の研究を補強しうる自然科学的研究。

これらの公募研究は、その分野が関連する研究項目や計画研究と緊密に連携しており、総括班とも常に連絡し、共同研究会やシンポジウムの企画に参画することで領域全体の活動に関係づけられている。

本領域は、古代西アジア都市の伝統を、都市文明史の最古層にして、長期にわたる都市・人間・環境の相互関係を考察するための最重要の研究分野として位置付け、西アジア都市の古代から現代までの変容を射程に収めながら、人間と環境にとって都市とは何なのかという「都市文明の本質」を考察する試みである。この構想は、多様な研究分野の研究者を糾合した学際的手法により実施され、歴史的・実証的な研究の上に普遍的・文明論的な考察を積み重ねる過程を含む。各研究計画代表者・分担者・協力者には、総括班から、全体の構想について理解を求め、（１）独自の調査とデータ分析に基づいた個別研究を実施して、学問の前線を押し上げるような専門的・先端的な研究成果をあげること、（２）計画研究がカバーする研究分野における既存研究の現状を全体的に把握し、それを批判的に評価すること、（３）「都市とは何か、都市はどうあるべきか」という普遍的問いに対して社会的にもインパクトのある洞察を提示すべく、広い視野からのディベートを重ねること、という「詳細から全体に至る」3 つの課題のすべてに取り組む必要をメッセージとして随時送るように努めた。こうした領域の統一的運営に向けてのメッセージを受け、各研究班が、時には自律的に、時には連携しながら、先端的な専門論文と各分野の都市研究を俯瞰するレビュー・アーティクルの双方をまとめつつ、領域全体として、「都市文明とは何か」を考究する研究会・シンポジウムと「総論」の形成に向けた出版計画の詳細を検討、実施した。

９　研究費の使用状況

研究領域全体を通じ、研究費の使用状況や効果的使用の工夫、設備等（本研究領域内で共用する設備・装置の購入・開発・運用、実験資料・資材の提供など）の活用状況について、総括班研究課題の活動状況と併せて具体的かつ簡潔に２頁以内で記述すること。また、領域設定期間最終年度の繰越しが承認された計画研究（総括班・国際活動支援班を含む。）がある場合は、その内容を記述すること。

【設備・物品の購入と活用】

主要な高額調査・分析機器として以下を購入した。

（筑波大学）

・マルチコレクター型 ICP 質量分析計システム一式
・偏光顕微鏡
・分析天秤

（徳島大学）

・デスクトップ型 X 線回折装置
・走査電子顕微鏡システム
・イオンスパッタ
・地中レーダー探査装置
・自動乳鉢

これらの機材の導入により地球科学的調査や金属・地質化学分析のための研究環境を整備し、考古学遺物の分析プラットフォームを形成し、領域の分析部門としての機能発揮と、冶金考古学的研究を開始する準備を整えた。

また、文化遺産学・保存科学的研究のための X 線回折装置と工業用顕微鏡（筑波大学）、ならびに都市計画的研究のための中東都市多層ベースマップシステム（筑波大学）を購入し、研究に活用した。

その他、物品費の多くは、西アジア考古学、楔形文字学、エジプト学・西アジア歴史学・地域研究など領域諸分野の研究のために有益な高精密衛星画像・書籍・研究資料の収集・分析、事務機器（コピー機、パソコンとその周辺機器など）に使用し、筑波大学西アジア文明研究センター、早稲田大学、東京大学、中部大学、金沢大学を基点として、関係の研究者の使用に供した。

【人件費・謝金等】

領域活動期間の２年目から（2019 年度）から 6 年目（2023 年度）まで、楔形文字学、古代西アジア・メソポタミア史、ならびに西アジア考古学・分析化学を専門とするポスドク研究者（助教）4 名を国際公募による選抜を経て、筑波大学に研究専任の助教として採用し、研究の加速化を図った。それぞれのポスドク研究者（助教）の雇用期間は以下の通り：

1. 板橋 悠 （考古学、人骨・動物骨コラーゲンの同位体分析による食性分析）：
   （2019（R1）年 5 月 1 日～2020（R2）年 2 月 29 日）
2. 三津間 康幸 （楔形文字学・セレウコス朝・アルシャク朝史）：
   （2019（H31）年 4 月 1 日～2021（R3）年 8 月 31 日）
3. Gina Konstantopoulos （楔形文字学・宗教文化史・古代メソポタミアの空間意識）：
   （2019 年（H31）9 月 1 日～2020（R2）年 12 月 31 日）
4. Timothy Scott Hogue（古代西アジア文献学、古代北シリア諸都市の認知考古学）：
   （2021（R3）年 5 月 1 日～2023（R5）年 6 月 30 日予定）

この内、板橋氏は、先史時代の複雑化社会を研究する「計画研究 1」、三津間氏、Konstantopoulos 氏、Hogue 氏は、古代メソポタミア都市を研究する「計画研究 2」における研究活動を推進するために中心的な役割を担った。これらポスドク研究者（助教）の他、研究能力の高い非常勤研究員を楔形文字学、考古学の分野を中心に雇用した。これら常勤・非常勤の研究員については、雇用していた者が転出した場合、代替の研究者を雇用し、領域全体の研究遂行能力を維持するように務めた。

また、領域の活動の事務局となった筑波大学西アジア文明研究センターでは、原則として、常時 2 名の事務職員を雇用して、領域内で行われるほとんどの研究会・シンポジウムならびに会議の運営、ポスター作成やメールの発送などの広報、出版事業を含む作業をおこない、領域全体の活動をサポー

トした。
　その他、トルコ、イラク・クルド自治区、エジプトでの発掘調査の協力者や発掘作業員への労賃・謝金、地下探査・保存処理の専門家などへの謝金、考古遺物の化学分析費用、英文論文等の校閲料等を人件費・謝金として計上した。

【海外渡航費】
　トルコ、イラク・クルド自治区、イラン、エジプト等西アジア諸国での発掘調査・現地調査やヨーロッパならびに北米各国での学会・研究会参加、博物館・図書館での調査・研究、さらに西アジアと欧米各国など海外の研究者を研究会・シンポジウムに招聘するための交通費と滞在費を、海外渡航旅費として計上した。

【研究費の繰越し】
　2020 年春～2022 年夏まで長期間にわたり新型コロナウイルス感染症の世界的流行がおこり、国際的な人的移動・接触が制限され、海外での現地調査や共同研究、国際学会への対面での参加、あるいは海外から研究者を招聘して行う対面での研究会・シンポジウム等は不可能になった。これに対して Zoom 等の活用によるオンラインでの研究会開催や情報交換をはかる一方、本来、交通費に充てていた費用を中心に、以下のような研究費の繰越しを行った。

・計画研究１（代表：三宅裕、筑波大学）2022 年度：3,590,000 円繰越し
・計画研究２（代表：山田重郎、筑波大学）2021 年度：2,200,000 円繰越し；　2022 年度：6,700,000 円繰越し
・計画研究３（代表：近藤二郎、早稲田大学）
　2020 年度：6,776,371 円繰越し；　2021 年度：8,078,724 円繰越し；　2022 年度：7,257,465 円繰越し
・計画研究４（代表：安間了、徳島大学）
　2018 年度：2,000,000 円繰越し；　2020 年度：3,200,000 円繰越し；　2021 年度：1,830,506 円繰越し；　2022 年度：2,291,793 円繰越し
・計画研究５（代表：守川知子、東京大学）
　2018 年度：2,500,000 円繰越し；　2019 年度：3,970,000 円繰越し；　2020 年度：6,750,000 円繰越し；2021 年度：7,400,000 円繰越し；　2022 年度：3,850,000 円繰越し
・計画研究６（代表：松原康介、筑波大学）2020 年度：4,300,000 円繰越；　2021 年度：4,577,947 円繰越；　2022 年度：20,000 円繰越し
・総括班（代表：山田重郎、筑波大学）2021 年度：1,100,000 円繰越し；　2022 年度：6,400,000 円繰越し

　上記のように、各計画研究ならびに総括班において繰り越した研究費の一部を用いて、研究資料の収集、非常勤研究員の雇用を行った。それによって既存史料に基づく研究の一層の進展とオンライン研究会を中心とする内外の研究者との情報交換、研究成果の共有、ディベートの活性化をはかった。
　2022 年夏季以降は、感染症の流行が収束に向かったため、トルコ、イラク・クルド自治区、イラン、エジプトなどでのファールド調査ならびに欧米諸国の研究者との対面での共同研究を活性化した。この状況に対応して、多くの計画研究において繰越した研究費を、海外調査旅費やそれに伴う人件費・謝金、海外からの研究者招聘などのための旅費に活用した。
　最終年度の 2022 年度には、6 つの計画研究のすべてと総括班の予算の一部を一斉に繰り越して研究資金を確保することで、領域の活動を 2023 年度も継続することを決定した。これによってパンデミック期に遅延が生じた海外でのフィールドワーク等の活動を延期して 2023 年度に実施するとともに、2023 年 6 月 2～4 日には、海外から 10 名の研究者を招聘し、つくば国際会議場の大会議室をシンポジウム会場として借り上げて 3 日間のシンポジウム：*Cities and Urbanization in West Asia and Egypt–Shapes, Functions, and Ideology* を開催した。

10　当該学問分野及び関連学問分野への貢献の状況

研究領域全体を通じ、本研究領域の成果が当該学問分野や関連学問分野に与えたインパクトや波及効果などについて、「革新的・創造的な学術研究の発展」の観点から、具体的かつ簡潔に１頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、応募時に「①既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成を目指すもの」、「②当該領域の各段野発展・飛躍的な展開を目指すもの」のどちらを選択したか、また、どの程度達成できたかを明確にすること。

本領域研究は、応募時「①既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成を目指すもの」として申請された。領域研究の特徴は、「都市とは何か」という問題を、地球上最も早く都市文明が生まれ発展した西アジア地域に焦点をあて、先史時代から現在までをカバーする長射程で、超領域的視点から複眼的に考察することにある。「都市とは何か」という問いへの答えは、考古学、建築学、社会学、歴史学といった一分野の観点から特定の都市・地域・時代をモデルに「都市」の定義を試みることでは解決され得ない。定義付けという行為は、分野優先的・ドグマ的な性格を持っており、分野や研究者ごとに異なる定義が提案される。様々な定義は、都市の特徴を一局面において端的に言い当てるが、都市という現象の一面を捉えているに過ぎず、「都市の本質」を必ずしも十分に説明しない。本領域研究によって行われた多分野協働による長射程の都市研究は、こうした課題を克服し「都市文明の本質」に迫るおそらく唯一の方法であると思われる。本領域研究は、古代から現代まであまたある都市を構成する建築学的・社会的要素を比較格子のなかに捉え、その多様な形態とその背景となる自然・歴史・政治・宗教・社会との関係を理解し、**都市の生成・変容・没落のパターンを把握すること**が、「都市の本質」を理解するということにほかならないことを明示した。**歴史的に連続する容態として西アジアに追跡される「都市の本質」**は、本領域研究において諸分野で実施された多くの個別研究で分析され、学際的・分野横断的研究会やシンポジウムを通して論じられた。それは、おおよそ以下のように要約される。

【複雑社会から都市へ】紀元前 3500～3200 年ころ周囲の村落の人口を吸収してメソポタミア南部で誕生した人類最古の都市ウルクでは、多様な職業や社会階層の人々が、祭祀を共通の精神的支柱として集住し、複雑社会を管理する行政と情報管理手段としての書字技術を発達させ、都市民の生命と財を守る城壁を設けて都市を形成した。さらに、我々の領域研究の長射程では、都市に先行する複雑社会の発生もまた研究された。紀元前 1 万年前後、南東アナトリアやメソポタミア北部の農業社会誕生以前の狩猟採集社会において、集落中に公共建築物を造営する集落構造や、集落から独立した大規模な祭祀施設の建設が確認される。このことは、祖先礼拝や何らかの神格を中心に集合する精神的エネルギーが、集落や集落ネットワークの形成に果たした役割の重要性を示唆する。こうした様態が、その後の南メソポタミアでの都市の成立にどの程度の直接・間接の影響を与えたかを論じるにはなお「失われた環」を埋める新データの発見が必要である。それでもなお、南メソポタミアにおいても最古期の都市遺構の層の下には、以前の時代から神殿と見なし得る祭祀施設が建設されていたことを考慮すると、K. Wittfogel が提唱した灌漑農業のための労働力集中の要請が中央政権と都市を生んだという学説に反して、宗教儀礼が都市形成に果たした役割の重要さが示唆される。

【都市の多様化と変容】神殿構築物を中心に市域が広がり、行政組織によって都市とその周辺の住民が統合され、都市域を城壁が取り巻いて防備する典型的メソポタミア都市のプランは、平坦な沖積平野の河川沿いに築かれ、神殿が都市の中央権力として行財政の中心であった南メソポタミアの伝統的神殿都市においては、その後も長期にわたり維持された。しかし西アジア各地においては、異なる地理的・政治的・社会的環境において、都市プランや建築学的特徴においても、政治的・社会的役割においても、様々な特徴を持つ都市が建設されていった。都市は時代の変遷と共に変容し、あるものは破壊されたり、放棄されたが、シリアのアレッポやダマスカス、イラク・クルディスタンのエルビルのように、前 3～2 千年紀から現在まで途切れることなく変容を重ねながら生存している都市もある。都市の歴史的変容には、大きな中央権力を持つ領域国家の出現・盛衰や行政経済ネットワークの発達・変化が大きな影響を与え、変わりゆく地理的・歴史的環境の中、宗教文化的・政治的・経済的機能と重要性、面積と人口密度の大小、人口構成要素・言語・文化とその多様性、交通ネットワーク上の位置、経済的重要性などの要因によって様々な性格・形状・規模の都市が形成された。そして、変化する環境とともに、都市の伝統的古層を内部に包含しつつ新しい建築学的特徴が上塗りされて、重層的な都市景観が形成されていった。したがって、都市とその遺構は、その都市が生まれ変容していった歴史と文化を重層的に包含する歴史の鏡であり、都市景観は時代をリードした都市を核とする政治・経済・社会・文化を反映して形成されたことが、多くの具体的事例を通して確認された。その成果を、5 巻一組の英語の書籍（上記、4–5）として編集し、公刊する準備も完了した。

11　若手研究者の育成に関する取組実績

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究遂行に携わった若手研究者（令和５年３月末現在で 39 歳以下。研究協力者やポスドク、途中で追加・削除した者を含む。）の育成に係る取組の実績について、具体的かつ簡潔に１頁以内で記述すること。

【ポスドク研究者の雇用とプロモーション】

領域研究初年度（2018 年度）に本領域研究のための研究専任の助教（筑波大学、人文社会系担当）の公募を行い、翌年度（2019 年後）の 4 月、5 月、9 月に以下の 3 名が、次々と着任した。

・三津間康幸（研究項目 A02、計画研究 2)、専門分野：楔形文字文書（天文日誌)、ギリシア語・アラム語史料を用いたセレウコス朝・パルティア期の歴史研究（4 月着任、着任時 41 歳）
・板橋悠（研究項目 A01、計画研究 1)、専門分野：考古学、新石器時代、同位体分析による食性復元（5 月着任、着任時 32 歳)。
・Gina Konstantopoulos（研究項目 A01、計画研究 2)、専門：楔形文字学、宗教文化史、古代メソポタミア世界の空間認識（9 月着任、着任時 33 歳)。

以上の 3 名は、それぞれの専門研究分野において、古代西アジア都市とそれを取り巻く環境世界の研究に取り組みながら、計画研究や領域が企画する研究会で研究発表を行い、年次報告書に論文を執筆したほか、それぞれの分野の専門誌に研究成果を積極的に発表している。また、イラク・クルド地区やトルコでのフィールド調査に参加し（板橋)、大英博物館での粘土板文書調査を行い（三津間)、ニューヨーク大学、UCLA などの研究会に参加・発表する（Konstantopoulos）など、海外での研究活動も積極的に行って、研究成果をあげながら、自らの研究スキルの向上に努めた。

板橋氏は、2020 年度から、筑波大学人文社会系の専任助教（考古学、テニュア・トラック）として採用され、Konstantopoulos 氏は、2020 年 12 月から UCLA に専任助教（楔形文字学、テニュア・トラック）として着任した。また、三津間康幸氏も 2021 年度から専任の准教授として関西学院大学文学部に着任している。

上記の Gina Konstantopoulos 氏の後任として、国際公募をへて、2021 年 5 月に Timothy Scott Hogue 氏を研究項目 A01、計画研究 2 の研究を強化すべく、筑波大学人文社会系助教として採用した。採用時は、新型コロナウイルス流行の最中であったため 2021 年 9 月末までは、オンラインで領域のプロジェクトに参加し、その後、来日して筑波大学に着任した（着任時 31 歳)。Hogue 氏は、旧約聖書学、セム語学、古代北シリア都市景観の認知考古学的分析を専門とし、研究会での発表、関連研究論文の作成・発表のほか、領域が出版を準備する英文出版物等の編集などにも貢献した。Hogue 氏は、領域研究に従事する中、スキルアップとキャリア形成に励み、2023 年 6 月をもって転出し、8 月からペンシルベニア大学に専任助教（旧約聖書・古代近東研究、テニュア・トラック）として着任することが決定している。

【研究協力者】

領域のすべての研究項目・計画研究が、ポスドク研究者や大学院生を数多く（合計 50 名程度)、研究協力者として雇用しており、これらの研究者を積極的に西アジア各地（イラク、トルコ、イラン、エジプト、レバノンなど）や欧米でのフィールドワークや国際会議に参画させ、領域や計画研究が主催する国内外で行う研究会への参加を促した。

また、ポスドク研究者の中には、本領域で研究協力者として研究に従事した後、常勤の研究員・教員のポストを得たケースもある。（奈良県立橿原考古学研究所、調査部、技師［2020 年着任］1 名、（名古屋大学高等研究院、特任助教［2022 年着任］1 名)、（金沢大学、国際文化資源研究センター、特任准教授［2020 年着任］1 名）

12　総括班評価者による評価

研究領域全体を通じ、総括班評価者による評価体制（総括班評価者の氏名や所属等）や本研究領域に対する評価コメントについて、具体的かつ簡潔に２頁以内で記述すること。

外部評価委員ならびに海外の研究協力者から定期的に外部評価を受け、領域の活動を実施した。以下は、考古学、楔形文字学、文化地質学、イスラーム都市研究の専門研究者 4 名（Mirko Novák、月本昭男、鈴木寿志、三浦徹）の各氏から 2023 年 6 月に寄せられたコメントである。

The research project *The Essence of Urban Civilization: An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities* takes an interdisciplinary approach to the research of the early urbanisation of West Asia and its effects up to the medieval era. It is divided into five thematic fields and six research groups that look at different aspects. In addition to the archaeological and philological sources, various proxies are evaluated to reconstruct the natural environmental conditions, the basis of subsistence, and the fabrics of urban settlements. From all these sources, the essence of urban civilisations in Western Asia is to be tapped. The very question of the project is of extraordinary importance, as the basic concept of urban civilisation in human history began in West Asia and it is still not fully understood under what circumstances it came about and how it developed over the millennia. Due to the complexity of the data basis and the research question, the interdisciplinary approach is very welcome and probably the only promising one to achieve the set goals. The working groups are very well defined according to the complexity of the topic, and clearly structured, so that they promise to deliver important special results, which will then lead to deeper insights in a cross-analysis. From my personal point of view, not only the discourse between Near Eastern Archaeology and Assyriology, that means Philology, is particularly welcome, but also that between researchers who work on Mesopotamia and those who deal with Egypt. This juxtaposes the two oldest human civilisations and questions the parallels and differences between their respective histories of urbanization.

June 14, 2023
Prof. Dr. Mirko Novák
Institut für Archäologische Wissenschaften
Abteilung Vorderasiatische Archäologie
Universität Bern

山田重郎教授を領域代表者とする「都市文明の本質」（「新学術領域研究」）は、気候学、地誌学、資源学など自然科学を導入するとともに、考古学による資料調査および文献資料研究（人類の文字文化は西アジアで始まった）に基づき、人類の文明発祥地である西アジアの都市社会の発生の条件、成立の経緯、歴史的変容を総合的に解明する意欲的な研究事業であった。この研究事業は、国際的にみても、西アジアを対象とする自然科学と人文科学の融合研究という意味で、ドイツ・テュービンゲン大学を拠点として 1969～1992 年に実施された“Tübinger Atlas des Vorderen Orients”に続くものであった。

開催された国際シンポジウムは、海外の高名な研究者を招いて「御高説」をうかがうといった型通りの会議ではなく、本研究事業に関わった内外の研究者が最新の資料分析に基づいて独自の見解を発表し合う、学術の名にふさわしい、創造性に富む学術会議であった。刊行された年次報告書は、今後の西アジア学術研究に必須となる論考の数々を含んでいる。加えて、「計画研究１～６」において、本事業に関わる研究者たちがそれぞれの研究成果を英文の論文に仕上げて、国際的に発信したことはじつに喜ばしいことであった。わけても、評価者の専門領域に触れる「計画研究２」においては、この間、20 本におよぶ英文論文が刊行され、日本における研究レベルの高さが国際的に示された。

日本の歴史学界において、古代西アジア研究は、ともすれば、「ギリシア文明」以前の地域研究の一つとしてみなされがちであった。そうしたなかで、この度の研究事業は都市文明の端緒を切り拓いた西アジア地域の人類史的意義を明らかにした、といってよい。その成果が叢書として刊行された暁には、日本における西アジア研究の高評価が定まるであろう。

この度の研究事業は、西アジア領域研究に携わる若手研究者の育成という点でも、目覚ましいものがあったことを、最後に付記させていただこう。

2023 年 6 月 25 日
立教大学・上智大学名誉教授
（公財）古代オリエント博物館館長
月本昭男

本新学術領域研究では、西アジアを舞台とした古代都市の発生・発展・衰退といった変遷過程を、学際的な視野で解明しようとしてきた。中でも地球科学的な分析手法を積極的に導入し、客観的事実に基づいた古代都市変遷の解明を試みている点は、大いに評価できる。考古遺物について現地において携帯式蛍光 X 線分析装置による化学分析を行い、また氾濫原堆積物や岩石・鉱物試料については日本へ持ち込んだ上で、蛍光 X 線分析装置を用いた化学分析と質量分析計を用いた同位体比の測定を行い、遺物の原産地特定と都市への資源集積過程を明らかにした。また降雨試料の化学分析およびトラバーチン（石灰質化学沈澱岩）の年代測定・同位体分析による古気候の推定や、宇宙線生成核種濃度から遺跡周辺地形の地表露出年代を見積もるなど、資源面の分析に留まらず、水文や地形といった古環境の復元に寄与する研究も進められた。これらの研究成果により、古代西アジア都市の資源利用と古環境の実相が明らかにされ、都市の発生・発展・衰退に関する資源的・環境的要因の解明に寄与することができた。今後蓄積された多くのデータを基に、考古学者と地球科学者の連携が進み、この分野の変革へとつながっていくことを期待したい。

2023 年 6 月 20 日
大谷大学社会学部・教授
鈴木寿志

本研究では、諸分野の実証研究と学際的総合研究の結合を企図し、研究会や国際シンポジウムなどを開催し、毎年度「研究成果報告」冊子をまとめ成果の共有を行った。研究班 A01 と B01 では、都市文明を支えた石器・金属器・土器の技術やその伝播を検討するため、遺物・遺構の形状や組成の分析を行い、南北のメソポタミアやイランの都市との間での材料や製造技術の類似性が確認され、地域間の移動の可能性を示唆した。A０２では、メソポタミア都市の発展と変容について、王宮・神殿とその組織に着目した類型が示され、楔形文字文書を用い王権や住民について実証研究を積み重ねた。C01 では、対象地域を北アフリカから中央アジアまで広げ、中小の都市にも着目し、都市の理念や機能あるいは文化保存について研究を進めた。国内外の研究者による英文叢書(全５巻）の刊行は西アジア都市の諸相を集約する定本となることが期待できる。

他方、本研究が全体として目指した学際的な研究課題について、コロナ下にあって、都市文明の本質を主題とする研究集会や成果を持つことはできなかった。問題は、実証研究と比較研究の相克にある。歴史上に都市は星の数ほどあって、しかも都市の要素や構成は多元的であり、都市研究は、実証性を重んじるほどに多様な個別例の提示に終わってしまう。比較には、共通の指標が必要となる。まず、古代西アジア都市についての指標群を作成することであり、このことは 2023 年の国際シンポジウムでも提起された。この指標群も対象とする都市も、すべてを網羅する必要はない。比較の目的は、異同を手がかりに、なぜそうなのか（因果、原理）を明らかにすることであり、空欄があっても構わない。この指標群から都市の原型（プロトタイプ）を導きだし、イスラーム時代や近現代の都市との比較を行う。都市は常に、食糧資源等を獲得するため、政治権力、住民間、外部勢力と多元的な関係を築いた。都市の維持発展に必要な、ハードウェア（自然環境や建造物）とソフトウェア（社会関係)、および共有される理念（イデア）や情報の３者とその関係によって、複数の都市（社会）のモデル（類型）が構築できるだろう。

本研究の課題である「都市文明の本質」の答えは、都市を定義することでも、特定の単語（要件）に収斂させることでもない。複数の都市類型をもとに、都市（複雑社会）が生成・発展・変容・崩壊する要因（メカニズム）を示すことが、多元化する現代社会（文明）の問題解決のヒントとなる。

2023 年 6 月 19 日
お茶の水女子大学名誉教授
（公財）東洋文庫研究員
三浦　徹